生命の研究

よろすが

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生命の研究

【Ｎコード】
Ｎ８３３８Ｐ

【作者名】
よろすが

【あらすじ】
記憶を失くした少年？ポセット？は、相棒の黒猫？ナット？と一緒に、放浪の旅を続けている。ある日、山道を行く途中、雨宿りに山小屋へ駆け込んだ一人と一匹。そこに住むおばあさんに、山のふもとの町へ届け物を頼まれた。快く了解するポセット。しかし、たどり着いた町は錆と植物に覆われた、捨てられた町だった。

その１　秋の山道（前書き）

思ったより時間かかりました。もう冬ですね。そもそも新年ですね。
今年もよろしくお願いします。

その1　秋の山道

秋晴れの空。時折強く吹く冷たい風が、紅く染まった木の葉を揺らし、乾いた落ち葉を少年の顔へと運んだ。

「うわっぷ」

顔に張り付いた葉を剥がし、落ち葉舞い散る山道を登っていく。

少年は群青に染まった服を身につけ、肩からは鞄を提げ、腰のベルトには二本のトンファーを備えている。首に巻いた黒のスカーフが、風にたなびいた。

少年は帽子を振って、張り着いた葉を掃った。灰色の髪にまた一つ、ひらりと落ち葉が舞い降りる。

「どんなに掃ったって無駄だよ、ポセット」

肩でだらりと足を垂らしている黒猫が言った。鼻の先から尻尾の先まで真っ黒な猫。ただ、両耳の先だけは白雪が積もったように真っ白なのだった。

ポセットと呼ばれた少年が答えた。

「でも、適度に払っておかないと体中葉っぱだらけになっちゃうだろ」

ポセットはやや神経質に葉っぱを掃う。

「ならないよ。ポセットは吹雪の中を歩いて雪だるまになりかけたときのこととごっちゃにしてるみたいだけど、落ち葉でだるまにはならない。絶対」

「なんだよ、あの時はナットだって凍えてカチンコチンになってたじゃないか」

黒猫のナットは顔に降りかかる葉っぱを器用に尻尾で掃い落としていた。

「だって猫なんだもん。寒いの嫌いだもん」

淡い色に染まった山には、ポセット以外の人は見つからなかった。

しばらく登ってきた。日も高い。

ポセットは大きな石に腰掛け、鞄から、前の町で買ったスティック状の保存食料を取り出した。小麦粉などを練って乾燥させたもので、あまり味がしないうえに喉が渇く。

「オイラこれ好きじゃないよ」

「文句言わないの」

ちょっと食べて、落ち葉のベッドに寝ころんだ。風で木が揺れるたび、木の葉がひらひら落ちてくる。

「埋まっちゃうよ、ポセット？」

むくりと起き上がると、胸には思った以上に落ち葉が積もっていた。

「そうだ、落ち葉を集めて火をおこそうか。木の実でも拾ってきて、あぶって食べよう。今日はここで野宿だ」

ポセットはうきうきと子供のように枯れ葉を集める。

若干呆れ顔のナットが声をかけようとしたときだった。

ぽたりぽたり――。空はみるみる曇っていき、透明な滴が降ってきた。

「あ……あぁぁ……」

ナットの表情が険しく歪み、絶望に染まっていく。

「おや、雨だ……」

ポセットは枯れ葉に埋まって、呑気に空を仰いだ。首を温めるスカーフに、黒い毛玉が弾丸のように潜りこんできた。

「うわあああああああああああ！　濡れる！　死ぬぅ！」

「雨なんかじゃ死なないよ。いつも言ってるだろう？」

「死ぬよ！　空から水が降ってくるなんて、地獄だよ！」

「いつもいつも思うことだけど、お前はどうしてそんなに水が嫌い

なんだ……？」

「だって、怖いんだよ！」

雨は強くなることも無く、止むことも無く、しとしとと静かに降り注いでくる。ポセットがかき集めて作った落ち葉の山も水浸しになって、穴のあいたダムのごとく決壊した。

「冷たい雨だ……」

雨は服に染み、じんわりと熱を奪っていく。体の中にまで染み入ってこようとする冷たさを感じながら、ポセットは石に座り込んでいた。空を、見上げていた。

「ね、ねぇ、ポセット。早く雨宿りできるところを探そうよ。濡れちゃうよ」

「――ナットは、あったかいね」

それは確かに生きているという、紛れもない証拠だった。

「ポセットもあったかいよ」

視界の隅。喉のあたりに、三角形で先の白い耳が見える。ナットの耳がひこひこと音を探り、ちょこちょこと動く尻尾がくすぐったかった。

時々見失いそうになる、生きている実感。

「ありがとう」

ポセットは立ち上がり、雨宿りできるところを探し、走り始めた。

静かだった雨は、だんだんその勢いを増してきた。加えておせっかいな北風が雨粒を運び、ポセットたちをはやす。

「あ、あれ！　小屋があるよ！」

ポセットの腕のなかで、ナットが言った。

「よし、いこう」

北風が背中を押す。追い立てられるように、その小屋へと入って行った。

その1　秋の山道（後書き）

つづく。

その2　山小屋のおばあさん

落ち着いた木の香り。暖炉には灯がともり、沸騰したやかんから蒸気が吹き上げた。

「さ、温かい飲み物をいれてあげましょうね。ちゃんと拭かないと風邪ひくから、しっかり拭くんですよ」

「えぇ、ありがとうございます」

おばあさんはひじ掛け椅子からのそりと立ち上がって、杖をつきながら歩く。ポセットとナットはタオルで体を拭きながら、暖炉にあたっていた。

「旅の人なんて、いつ以来かしらねぇ」

おばあさんはゆらゆらと落ち着いた物腰で、湯気の立つカップを二つ、お盆に乗せて運んできた。

「んにゃ。それにしても、扉を開けて、おばあちゃんが居たときはびっくりしたね。外から見る限りじゃ、どうみても無人の山小屋だったもんね」

「こら、ナット」

おばあさんはふふふ、と体を揺らす。その顔はしわだらけ。目も開いているのか疑わしいくらいしょぼしょぼしている。でも、心なしかその仕草からは、まだまだ元気な様子が見てとれた。

おばあさんがカップをテーブルに置く前に、ナットが跳ねた。

「あっ！　ココアの匂いだ！」

やさしい香りのするココアの表面では、まだ溶けきっていないココアが滑らかな渦を作っていた。

ナットはカップに飛びつくと、体を大きく起こし、前足でカップの縁をしっかり押さえ、鼻をひくひくさせながら小さな舌を出したり引っ込めたりしだした。

「あらあら、猫ちゃん、ココア好きなの？」

「うん！　大好き！　――ただ、猫舌だからなかなか飲めないのが悔しいところで……」

ナットはぐるぐるぐるぐると回り続ける茶色い水面を見つめる。

「あら、もうちょっと冷ましてから出したほうがよかったかねぇ。なにしろ、頭から雨をかぶって寒いだろうと思ったものだから……」

「いいえ、ありがとうございます。こいつはいつもこうなんですよ。気にしないで下さい」

ポセットは一口、ココアをすすった。まろやかな甘みが広がって、体中に温かさが伝わる。

「おいしいです。とっても」

おばあさんはにっこりと笑った。

その日は、日が沈んでからもずっと雨が降っていた。

ポセットたちはおばあさんの好意に甘えて、一晩泊まっていくことにした。びしょびしょになってしまった服も、明日には乾いているだろう。

暖炉にあたり、すっかり乾いたポセットは、大きなタオルにくるまって半裸状態だった。

「ふぇっくしゅ！」

ポセットは暖炉に近づき、鼻をすする。

「いつまでもそんな格好じゃ、いくら温めても風邪ひいちゃうわねぇ」

ちょっと待っててと言い残し、おばあさんはよろよろと奥へ入っていった。

そしてすぐ引き返してきた。手にはなにやら持っている。

「こんなのしかないけど、裸でいるよりはましでしょ？　大きさが合うと良いんだけどねぇ」

「あ、どうも。助かります……」

それはセーターだった。緑色で、木の葉を思わせる刺繍がしてあ

る。ポセットはゆっくりと袖を通していく。

「ふぅ、温かいです。ありがとうございます」

「うふふ、あらあら、ぴったりね。これは丁度良かったわ」

「えぇ、丁度ぴったりです」

「ふふ……」

おばあさんが静かに笑ったのを、ポセットは見ていなかった。

暖炉に薪をくべ、ランプの明かりの下でおばあさんの手作り料理を食べた。

それから肩を揉んであげたり、旅の話をしてあげたり……。夜が更けても、山小屋の中はとても暖かかった。

ナットはポセットの膝の上で丸くなり、すぴすぴと寝息を立てている。

「しかし、どうしてこんな山奥に住んでいるんですか？」

「昔からよ。ある時、娘を連れて、二人でこの山小屋で暮らし始めたの」

「娘さんと……。あ、じゃあ、あの薪も娘さんが切っておられるんですか？　一人暮らしのおばあさんの家に、あんなにたくさん薪が

あるのは、少し変だなと思っていたんです」

ポセットは部屋の隅に山ほど積まれた薪に目をやった。均一な大きさで切りそろえられ、いくつか暖炉のそばにストックしてある。

「うふふ、よく周りを見る子だねぇ。でも、違うよ」

「え、違うんですか？」

「あれは、わたしの孫がやってくれるの。夏の間にたくさん切って、溜めておいてくれるのよ。少なくなっても、孫がまた持ってきてくれるわ。いい孫をもって、幸せだよ」

「お孫さんとは別に暮らしておられるんですね。娘さんもそこに……？」

「いいえ。確かに孫は、この山を下りたところにある町で暮らしているけど、私の娘はもう……」

おばあさんは窓の外を見つめ、じっと雨音に聞き入ったようだった。しかしその目の焦点は遙か遠く、空を越えてもまだ届かないほど遠いところにある。ポセットにはそう思えた。

「――そうですか……」

しばらく沈黙が続くかと思われたが、おばあさんが突然席を立った。のろのろと部屋の奥へ行き、すぐに引き返してきた。

手にはまた、きれいにたたまれた布があった。

「このドレスね、娘のものなの」

おばあさんは真っ赤だが飾り気のない、ひらひらしたドレスを広げて見せてくれた。

「小柄な人だったんですね、娘さん」

「ええ。これ、元は私のものだったのよ。私が、娘にあげたの。結局、娘には一度も着せてあげられなかったわ……」

風が窓を叩く。小屋が少し軋んだ。

「孫は嫌がるかもしれないけど、今度はこれを孫にあげようと思うの。……それでね？　あなた、もし山を下りていくのだったら、このドレスを孫に届けてくれないかしら？　どうしてもとは言わないけど……。孫は、山のふもとの町に住んでいるわ」

「え？　お孫さんって、女性なんですか？」

「男の子と、女の子と、二人いるのよ。薪を切ってくれるのは男の子のほう。女の子のほうは、私と一緒にご飯を作るの。実はそのセーター、男の子のものなのよ」

「そうなんですか……」

セーターの大きさからみて、男の子はポセットと同じくらいの体躯のようだ。ポセットはちょっとだけ親近感が沸いた。

「――わかりました。届けさせていただきます。どうせ、この山を越えるつもりでしたので」

「そう……、ありがとう……」

おばあさんはベッドへ、ポセットはソファへ。貸してもらった毛布をぐるぐる体にまいて、ソファに横になる。ドレスはきれいにたたんで、暖炉の上にそっと置いた。

ふくろうの鳴き声が響く夜空。山小屋の明かりが消えた。

その2　山小屋のおばあさん（後書き）

つづく。

その3　お届け物

トントントントン……。リズムよく流れる包丁とまな板の音。ポセットは目を覚ました。

「おはよぉ……ございます……」

「おはよう。もうすぐご飯が出来ますよ」

ポセットは熱帯夜を越えたようなひどく薄い格好だったので、冬眠の途中で起きたトカゲのように、のろ～っと暖炉にあたった。干してあった着替えがすっかり乾いていたので、早速それを着た。

「ふぅ、やっぱり、これが一番だ」

真っ赤なドレスは昨日と変わることなく美麗な赤色に染まっている。

やがて朝食が出来上がった。ポセットは寝ぼける黒猫を叩き起こし、朝食を頂いた。食器を洗い、掃除を手伝い、何度もお礼を言って、再び寝始めた黒猫をもう一度叩き起こしてから、小屋を出た。

「いつでもおいで。そしてまた、旅の話を聞かせてちょうだい」

おばあさんはにっこりと笑った。

「えぇ、きっと。それじゃあこのドレス、きちんと届けさせていただきます」

ポセットはきれいにたたまれたドレスを鞄に丁寧にしまった。鞄が膨れる。

「えぇ、ありがとう。元気でねぇ」

「ありがとうございました。では、お元気で」

「じゃあね、おばあちゃん」

「ばいばい、猫ちゃん。気をつけて行くんだよ」

見えなくなるまで手を振って、おばあさんと分かれた。

道は昨日の雨でびしょびしょだった。そして昨日ほど激しくはないが、やはりひらひらと落ち葉が舞う。道にも下り坂が多くなってきた。ふもとも近いだろう。

「そのドレス、本当に届けるの？」

「そりゃあ、届けるさ」

「なんか、嫌な予感って言えばいいのか……、寒気みたいなのがするんだよね」

「嫌な予感……？」

ナットは長く低く鳴いた。

「とにかく、約束は約束だ。何があっても届けるよ」

空では雲が時間と共にぐるぐる動いて、いつの間にかポセットたちの頭上には真っ青な空が広がっていた。

「あ、ポセット、あれ！」

ナットが指を指した。いや、指というより?手?を指したといったふうだったが。

ナットが指し示す方向には、空が映ったように澄んだ青をした、大きな海が見えた。

「海だよ！　海ぃ！」

「すごい、水平線が見えるよ。海なんて久しぶりに見たね。潮の香りがここまで漂ってきそうだ」

ポセットは深呼吸をした。湿った雨の匂いと、落ち着く木の香りが肺を満たした。

「ね、ねぇ、急に津波になったりしない？　ここ沈没しない？」

「し・な・い」

しばらく立ち止まり、木々の隙間から見える海を眺めていると、狐色の平地に広がる家々に気がついた。その建物の集まりは周りを大きな砦で囲まれているようだった。

「見なよ、ナット。どうやら、あれが町みたいだ。もう少しだね、がんばろう」

「うん、がんばろう！」

「お前は僕の肩に乗ってるだけじゃないか」

「乗ってるだけでも結構疲れるんだよ？」

とくに変わったこともなく、実にすんなりと山を下り、道の先に見える町へと向かう。遠目から見える町のシルエット。なかなか大きな町のようだ。しかし不思議と、そこに続く道には車などのタイヤのあとも、馬車や牛車の車輪の跡も一切なかった。

「まるで、何年も人が通っていないみたいだな」

道を囲む黄金色のススキ畑。冬の近づきを知らせる冷たい風が、ススキを倒しながら走る。

風は海から吹いているようで、ポセットには分からなかったが、ナットには確かに潮の匂いが感じられるようだった。

うねるススキ畑を横切り、寂れた道を踏みしめ、ポセットたちはその町へとたどり着いた。

その3　お届け物（後書き）

つづく。

その４　捨てられた町

町を囲む砦。見上げるほど大きなその門は、ポカンと大きく口を開けていた。ツル状の植物が砦の壁をはい上がり、所々ヒビが入って、見ていてとても不安になる。

「なんだ、これは……」

「うわぁ……」

一人と一匹はゆっくりと門をくぐった。辺りを見回し、慎重に歩を進める。人の影は見あたらない。

ポセットたちの視界に映るのは、並び立つ崩れかけた廃屋たち。鼻に香るのは、秋の風に交じった錆びのにおい。聞こえるのは、窓のない建物を容易に吹き抜ける風の音と、穴が開き、今にも音を立ててひしゃげそうな雨どいから雨水が滴る音。

「酷いな……。これじゃまるで、死都……って感じだ」

「誰もいないのかな」

「いたとしても、ろくな人じゃないと思うけどね」

ドレスを渡すべきおばあさんの孫は、この町で暮らしているはずだ。と、ポセットたちは町を闇雲に歩き回って、人の痕跡を探した。

「人どころか、ねずみ一匹見つからないよ」

ナットがぼやく。ポセットも疲れてきた。日も高いし、崩れた家の壁が丁度良い高さだったので、そこに腰掛け、鞄からスティック状の保存食料をとりだして、食べた。

「オイラこれ好きじゃないよ」

「昨日も聞いた。いらないなら無理して食べなくても良いよ」

ポセットがひょいっと取り上げる。ナットはちょっと、しまった、というような顔をしたが、すぐ意地を張ってそっぽを向いた。

ポセットはスティック状のそれを上から釣るようにぷらぷら揺らして、ナットを挑発する。

ふんっ、と鼻を鳴らして、バカにするなと言いたげにしていたナットだったが……、気になる……。頭の上で規則正しく揺れるそれが気になる……。

飛びつきたい……。

いやいや、なんのこれしき。負けるものかと顔を伏せ、こらえるように地面を見た。

しかし。に、にゃんと……、地面にまでぷらぷら揺れる影がくっきり……。

ナットは歯を食いしばり、眼を閉じ、しばらく自分もぷるぷるしたかと思うと、天に矢を放つ勢いで跳び上がった。ポセットもそれに合わせて、ひょいっとスティックを持ち上げる。

「あぁっ！　もぉっ！　このっ！」

ナットが跳び上がる度にひょいっ。またひょいっ。まだまだひょいっ。

謎の遊びはフェイントを交え、より高度かつ熾烈になっていく。

「うにゃぁあおおぉぉぉ！」

「いったたたた！　バカ引っ掻くな！　服に穴が開くだろ！」

かんしゃくを起こしたナットが、ポセットの足を引っ掻き始めた。

「ごーめーんなさいぃー！　文句言わないから食べさせてよー！」

「わかったから引っ掻くな！」

「違う違う、爪を研いでるんだよ。このところなかなか落ち着いて研げなくてさ」

「よせ、バカ！」

そんなこんなで、もそもそとランチタイム。空には煙のような頼りない雲がひょろろんと漂っていた。

町はとても静かで、投げた石が跳ねる音が、建物を伝わって町中に響き渡りそうだった。

「あのおばあさん……。もしかしてなにか勘違いしてるのかも……」

「勘違いって？」

「この町の様子じゃあ、どう見ても人は住んでないよ。それも二年や三年じゃない。この町から人がいなくなって、もっともっと時間が経ってるはずだ」

「おばあちゃんの孫も別のところに住んでるのかな？」

「きっとそうだ。もう別の新しい町に引っ越したんだよ。お孫さんはおばあさんを訪ねているみたいだから、お孫さんがいるのは本当みたいだし」

「じゃあ、この町は捨てられた町ってこと？」

「恐らくはね。――そうだ、せっかく来たんだし、何で誰もいないのか探索してみようか」

「えぇー、暗くなったらどこで寝るのさ？」

「それも探しに行くのさ。もしもどこにも寝る場所が無くても、一晩くらいなら廃屋でも野宿出来るさ」

「えぇ、やだよぉ、野宿なんて」

「――いつも野宿じゃないか」

その４　捨てられた町（後書き）

つづく。

その5　遭遇

さて、昼食を終えたポセットと、全身なめ終わってスッキリしたナットは早速町の探索を始めた。

しかし行けども行けども、あるのは廃墟と化した町並みだけ。同じような景色に疲れてきたポセットたちの前に、それは悠然と立っていた。

「あ！　あれ！　人がいるよ、ポセット！」

「――いや、あれは……」

遠くに見えるそれに近づいていった。正面に立って、見上げる。

「人じゃなくて、石像だったね」

「うん。どうやら、記念碑みたいだ。えっと、名前は……」

記念碑に刻まれた、朽ちかけた文字を読んでいく。

「？レパード＝リメルヒ？……。レパードさんって言う人らしいね。どうやら、町長をしていた人みたいだ」

「この人も、町を出てっちゃったの？」

「さぁ、それは分からないけど、もう亡くなってると思うよ。書いてある日にちが、今から五十年も前だからね」

レパードさんは右手で広く澄みわたる大空を指さし、半世紀の間に雨と風で削られたのだろう肘までだけになった左腕が、町を抱きしめるように大きく開かれていた。

「この町に、一体何があったと言うんだろう……」

「大津波とか？　大雨とか？　水没したんだったりして」

「こんな平地の町が水害にあうなんて、世界中海の下だよ。あと、ナットは水を怖がりすぎだよ」

ポセットはモニュメントの跡らしき石の土台に登り、レパードさんに並んで立った。視線の先にはＹ字に伸びる道と、ところ狭しと並び立つ廃屋たち。

「悲しいな」

「え、なにが？　どうしたの？」

「五十年もの間、自分の町がだんだん廃墟と化していく様をじっと見つめながら、それでも、大空をさしたまま、立ち続けてきたんだな……って思ってさ」

ポセットは見よう見まね、レパードさんと同じく右手で大きく天を指し、左手は大きく開いて立った。

「レパードさんも、久しぶりに人を見られて嬉しいと思うよ。もちろん、久しぶりに猫を見られたっていうのも大きいだろうけど」

「猫って言ってもね。ナットじゃまるで化け猫だからな」

「失礼な！　こんな賢いのに！　失礼な！」

「ははは……。ん？」

ポセットは右へ顔を向け、じっと何かを見つめて動かなくなった。

「どうしたの……？　右に何かあるの？」

肩に乗っているナットには、ポセットの頭が影になって見えない。頭に登って、ポセットの見つめる方向を見た。

「にゃ……」

わらで編んだ小さなカゴに色とりどりの果物をのせ、サンダルを履き、灰色のローブを身につけて、それはこちらを凝視していた。

「人だ……」

少年。銀色の髪の少年。呆然と、口を半分開いたまま、固まっている。

ポセットが声をかけた。

「あの、君は……？　ここに住んでいるのかい？」

離れている分、大きく呼びかけたその声は、返答を得ることなく町に響いた。

少年は我に返ったように慌てて逃げていった。カゴからぽろぽろと果物が落ちていくが、気にも止めずに走っていく。

「あっ、ま、待ってくれ！」

ポセットも追いかける。ナットが振り落とされないように実を低くして、言った。

「あの人、もしかして、おばあちゃんの？」

「わからないけど、違うとは言い切れない」

ポセットは逃げる小さな背中を追っていった。

その5　遭遇（後書き）

つづく。

その6　迷路と少年

少年を追って辿り着いたのは、ポセットの背丈を軽く超える高さを誇る、逞しい植物の領域だった。ちょうど、サトウキビ畑のよう。

全くつけいる隙間が無いように見えるそこに、少年は迷うことなく突っ込んでいった。

「どうやら、わかりにくいながらも道はちゃんとあるようだね」

「行こうポセット！　そこだよ、そこ！」

ナットは少年が消えた場所を指し示す。ポセットは思い切って突っ込んだ。

「ぶわっ！」

「ぶにゃん！」

草の壁が手荒く行く手を阻む。しかし、勢いに任せてなんとか壁を抜けた。

「ごほっ、ごほっ！　あぁ、驚いた」

「にゃぁ……、青臭くなった」

開けた視界の中に、少年の姿は見えなかった。

「見失っちゃったね」

「しかたないさ。どうやら、ここら辺に慣れているようだったからね。しかし裏を返せば、この近くに住んでいて、よくここを通ると言うことさ」

「もっと人がいるのかな？」

「かもしれない。きっと近くだ」

ポセットは迷路とも思えるその植物の群生地帯を歩み始めた。背の高いその植物は容易にポセットたちの視界を遮る。

しばらくうろうろとしていたが、消えた少年の痕跡も、出口も、自分たちの所在すら分からない。結局、植物の壁に呑まれ、立ち往生。

ポセットはキッと一点を見つめ、せかせかと歩き出した。

「こっちだ」

「なにかあったの？」

「いや、別に」

「勘？」

「勘」

ナットの髭が垂れる。

「ポセットの勘、頼りにならないもんなぁ」

「入ってきたときみたいに、草の壁を通り抜けて進めないかな？抜け穴があると見た！」

ポセットはがさがさと草をあさり始めた。しかし、どこにも抜け穴のようなものは見あたらない。

「ポセットの勘はいっつも外れるんだから。これは期待しない方がいいね」

「うるさいな。まだ決まったわけじゃないだろ。どこかにあるさ、きっと」

向かって右側の壁をかき分けようとしたときだった。

「うわぁっ！」

「うにゃっ！」

ポセットもナットもびっくり。草の壁から腕が生えた。

腕はばたばたと動いたかと思うと壁に引っ込み、またにょきっと現れた。草を大きく左右に開き、開いた草の間からは、銀色の髪をした少年が顔を出した。目は綺麗な緋色をしていて、肌は驚くほど白い。

「き、君は……」

「見たところ、銃は持っていないみたいだね」

少年は開いた壁をひょいっとまたいで、こちら側に来た。緑の壁が再び閉じる。

「ねぇねぇ、君は町の外から来たんだよね？　――どうしてこの町に来たの？」

少年はポセットに触れるくらい近づいてそう言った。人を試しているという感じがする。

ポセットは微動だにせず、まっすぐに少年の目を見た。背丈は大体同じくらい。体格も似ている。

「僕たちがこの町へ来たのは……」

「？あいつ？に言われて、僕たちを見張りに来たんでしょ？」

遮るように言った。細く、睨むような目で、しかし落ち着いた雰囲気で、ポセットを見る。

少年が放つその雰囲気は、まるで鋭利な氷の刃のようで、冷たく、且つ張り詰めていた。

「？あいつ？……？」

少年はしばらくポセットの顔をじっと見ていたが、急に顔をほころばせて、にっこりと笑った。

「――ううん、僕の勘違いだったみたいだね。僕は？テルル？。よ

ろしくね」

唐突に自己紹介をしたその少年。握手を求めて手を差し出してきた。

「――僕はポセット。この猫はナット。一緒に旅をしている。よろしく、テルル」

手を合わせた。瞬間、ポセットの顔がほんの少しだけ、強ばった。

テルルは、ポセットに会わせたい人がいるのだという。

「さぁ、こっちだよ、着いてきて！」

テルルははしゃぎながら道を進んでいく。ポセットはベルトに納められたトンファーの握りを確認して、ゆっくりと後を追って歩き始めた。

ポセットの異変に気づいたナットが、ポセットにしか聞こえないほど小さな声で尋ねた。

「ポセット、どうしたの？」

ポセットも小さな声で囁くように答える。

「今、彼と握手したけど……」

「うん、見てたよ」

ポセットが、握手をした右手を握る。

「冷たかった……。とても。まるで、石みたいにね」

「――冷え性なんじゃないの？」

「今朝、嫌な予感がするって言っていたのはお前だろう。それに彼は僕と背丈も似てる……。やっぱり、あのおばあさんの孫かもしれないね」

「あの人が？」

テルルはときどき振り返りながら、するすると進んでいく。

「しかし何か……。変な感じがする。お前が言う、嫌な予感というか……。念のため、警戒は怠らないでいよう。あと、ドレスを預かっているってことは内緒だよ」

「どうして？」

「念のためさ」

ポセットとナットは訝しみながらも着いていった。

その６　迷路と少年（後書き）

つづく。

その7　荒いお出迎え

植物の壁は複雑に入り組み、天然の迷路と化していた。

ポセットは面白げもなく続く植物の壁にすっかり飽き、なにか意味のない労働を強いられている気分になってきた。

そんな中、テルルは目印ひとつないにも関わらず、幾本にも分かれた道から、目的地に続く道を迷うことなく選び取っていく。

「随分と慣れているんだね。こんなに複雑なんじゃ、僕たちだけだったなら間違いなく迷っていたよ」

「僕は毎日この迷路を通っているから、仕方ないよ。大体、感覚で分かるんだ。もうすぐ着くよ。――ほら、次の角を曲がったら、到着」

テルルが道の先を指す。角を曲がると、壁が途切れ、広い空間につながっているようだった。一歩、また一歩と進むにつれて、だんだん黒い塊が壁から姿を現した。それは小屋だった。見るからに古い建物だが、造りはしっかりしているようだ。

「あそこに住んでいるんだよ」

「君一人で？」

「ううん。お姉ちゃんもいるよ」

そう言って、テルルは走り始めた。

「お姉ちゃんだってさ、ポセット」

おばあさんの孫も、男の子と女の子の姉弟のはず。ますます可能性が高い。

壁の陰に隠れたテルルの声だけが聞こえてきた。

「おねぇちゃーん！　人だよ！　やっぱり、人がいたよ！　見間違いじゃなかったよ！　それに、怖くないよ！　いい人だよ！」

壁から姿を現したテルルが、ポセットたちに向かって指を指す。ほら、ほら、見て、と壁の陰にいるのであろう？お姉ちゃん？に話しかけている。

早く早く、とテルルははやし立てるが、ポセットは急ぐことなく歩いていった。

「ほら、お姉ちゃん、ポセットくんっていうんだ！　見てよ、なんで出てこないのさ？　ねぇってば！　――うわっ！」

壁の陰から手が伸びてきて、テルルの腕をつかみ、テルルごと陰に隠れてしまった。

「あれ、どうしたんだろう？」

ポセットがちょっと急ごうとしたときだった。

「止まりなさい！」

声と共に、左の壁から、ぬっ、と銃がのびてきた。銃身の長い銃。腔線が覗く銃口が一つ、ポセットの頭に照準をあわせ、ピタリと止まる。

高く、綺麗な声が言う。

「何が目的なのか知らないけど、出て行ってもらうわ。短い命がもっと短くなる前に、ここから消えなさい！」

何やら、ややこしい誤解が生じているようだ。とにかく、銃を下ろしてもらわない限りは説得も何もあったものではない。

「ちょっ、ちょっと待ってくれ。僕は別に怪しい者なんかじゃ……」

「怪しいヤツに限ってそう言うのよ。来た道を引き返して、失せなさい」

ポセットは銃口に向き直り、姿なき壁の中の声と対話を試みた。

「来た道なんて、わからない。テルルくんに案内されてやっと辿り着いたんだ。手を挙げるよ。足も動かさないし、なんなら後ろだって向く。だから銃を……」

「そうはいかないわ。とにかく、あなたはここにいちゃいけないのよ。何も知らないならなおさらね。さっさと消えて。五秒あげるわ。五秒以内にここから消えるか、命を捨てるかさっさと選ぶことね」

「まってくれ、僕はただ……」

「四……、三……！」

「ポセット！　ダメだ、早く行こう！　おとなしく帰ろう！」

「――いやだ」

「え！　なんで！」

「消えろだの、失せろだの……。こちらの事情も聞かないで、そこまで言われると、なんだかさらに意地を張って、何が何でも帰りたくなくなった。悪いけどナット、僕はここを動かないよ」

「何言ってるのこんな時に！　意地っ張り！　バカ！」

ナットが言い終わるのとほぼ同時に、銃口が火を噴いた。

その7　荒いお出迎え（後書き）

つづく。

その8　キツそうな人

音よりも早く、それこそ稲妻のような早さで弾丸は飛行する。引き金を引けば当たっている、そう言っても過言ではないほどの速度。

そのただ中で、ポセットの周りだけが時間が止まったように静かになっていた。

ポセットの目には、走る弾丸が見えていた。見えていると言っても、速いことに違いはない。一秒の何百分の一、何千分の一という時間の中でさえ、その速さは衰えを知らず、ポセット頭を穿とうと向かってくる。しかし理由(わけ)あって、ポセットの動きはそれを捉え得るのだ。

完全に頭をとらえていたはずの弾丸はポセットの頬をかすめ、背後の草の壁をえぐって消えた。

銃声が空に重く響く。？アクセル？を解除したポセットは、恐らく驚愕のあまり呆然としているのであろう声の主に向かって、言った。

「僕は何もしない。ただ、探している人がいて、それが君たちと関係があるかもしれないから、テルルくんに着いてきたんだ。それだけなんだ」

少し間をおいて、声が聞いた。

「何で探しているの」

「渡すものがあるんだ。絶対に渡したいものがね」

「そう……。あなた、なんだか変な感じがするわね……。それに、この近さで弾がそれるなんて、よっぽどの強運だわ。でも、悪いことは言わないから、さっさと出て行って」

「いや、出て行かない。気にくわないのなら、もう一度撃つといい。弾が切れるまで付き合うよ」

声はため息をしたようだった。

「いいわ。ちょっとだけ話を聞いてあげる。銃を構えているのも結構疲れるしね。でも、武器になるものは全部よこしてもらうわよ」

ポセットは両腰のトンファーと、ベルトの後ろに据えてあるナイフを鞘ごと放った。

「これでいいかい」

「その鞄もよ。何が入ってるかわかったもんじゃないわ」

ポセットはそっと鞄を置き、離れた

すると壁から女性が現れた。銀の長い髪と、緋色の瞳。そしてやはり、驚くほど白い肌。手には先ほどの銃を持っている。

彼女はポセットと同じか、少し年上くらいの容姿にもかかわらず、身につけている絹の服は落ち着いていて、家政婦のようだった。

ポセットとナットには違和感しか湧かなかった。しかも彼女はポセットをじろじろと見まわして、

「あなた、なんだか変な格好ね。そんな格好であちこち行ったり来たりしてるの？」

などと言う。

「とにかく、こんなところで立ち話なんて面倒だわ。さっさと家に入りなさい。こっちよ、ついてきて」

放られたものをさっと拾い上げ、彼女はせかせかと歩いて行く。

「キツそうな人だね」

ナットが言った。ポセットが口に人差し指を当てる。

小屋の中は案外広く、部屋割も玄関、リビング、トイレ、寝室、物置としっかりしていた。

「そこに座って。言っとくけど、少しでも変な素振りを見せたら、構わずふっ飛ばすわよ。今度は外さないわ」

ポセットは言われるまま、木製のテーブルに向かう頼りない椅子に腰かけた。椅子がギシッと音をあげる。彼女は銃をポセットに向けたまま、向かいあって座った。同じく椅子が軋む。

「なにもしないさ。だから銃を……」

「どうかしらね」

彼女はよりしっかりと銃を握る。

「――あの。テルルくんはどうしたんだい？」

「あぁ、うるさいから眠らせてあるわ。あの子、いつも寝るときに睡眠薬飲んでるから。まぁ、あの子には栄養剤だと言ってあるけど」

彼女の顔が曇る。しかしすぐ気を取り直して、ポセットに銃を突きつける。

「――って、そんなことより、あなた何しに来たのよ？　まさか、こんな廃墟の町に観光に来たなんて言うんじゃないわよね？　ふっ飛ばすわよ？」

ポセットは両手をあげて、めっそうもないと首を振る。ナットもブンブン首をふる。

「さっきも言ったけど、僕たちは頼まれたものがあって、届けに来たんだよ。それが君たち宛てかどうかは知らないけど」

「見せなさい」

ポセットは彼女の足元にごちゃごちゃ積まれた鞄とその他に目をやった。彼女も気付いて、横目でポセットを睨みながら鞄をあさる。

その8　キツそうな人（後書き）

つづく。

その9　廃墟の女王

彼女は目を見開いて、ゆっくりとドレスを引き出した。銃を放し、ドレスを机いっぱいに広げ、邪魔なポセットの鞄を机からドサッと落とす。がちゃん、と鞄の中の消毒液の小瓶が割れる音がした。

「あぁ……」

ポセットが悲しげに声を漏らす。

「これ、誰にもらったの？」

「山の上に住んでいるおばあさんから。山のふもとの町に孫が二人住んでいるって聞いてね。届けてくれないかって頼まれたんだよ。そしたら、テルルくんに会って……」

「私たちが、そのおばあさんの孫かもって思ったってわけね……。おばあさんにはこれをもらっただけ？」

「え……、うん、そうだけど」

彼女はにやりと笑って、ドレスをぐるぐる手荒に巻き取ると、机のわきに置いた。そして足元に放置されたポセットの荷物をさらに乱暴にひっつかむと、机に叩きつけるかのように置いた。

「疑って悪かったわね。どうやら、あなたはお人好しのただの旅人みたいだわ。これ返すわよ」

「すると、やっぱり君はあのおばあさんの……？」
「何言ってるのよ、そんなおばあさん知らないわ。私はこの町から出たことなんてないんだもの」
「え？」
「それに、この町にはもうわたしとテルルしか住んでいないわ。他を当たるのね。それとももう一度山に登って、おばあさんに言ってきたら？　お孫さんはいませんでした、って」
「そ、そう……」
ポセットはしっくりこない感じがしたものの、とりあえず、違うと言うのだから仕方がないし、半ば自動的にその場を去ろうとした。銃も未だ目を光らせている。
ポセットの手がドレスにかかる寸前、彼女がドレスを取り上げた。ポセットの手がむなしく空をつかむ。
「あら、これはいただくわよ」
「な！　何言ってるんだ！　返してよ！」
机を挟んで向こう側へ手を伸ばす。彼女はひょいっとドレスを振り、手をかわす。
「ほらほら、こっちよ」
「このっ！　いい加減に！　しろっ！」

ポセットが手を繰り出すたびにひょいっ、ひょいっ、またひょいっ。

ナットは机に座って、主人を助けるわけでもなく、彼女を邪魔するわけでもなく、ただ二人の顔を見比べて目を動かしていた。

「どこかで見たような光景……」

そんな事を思っていた。

「あげないわよ。これは私のものになったの」

ポセットは机に手をついて、身を乗り出す。

「なんでそうなるんだよ！」

「勝手に侵入してきたんでしょ？　料金くらいとって当然よ。入場料よ、入場料」

「に、入場料？　そんなの君の勝手で……！」

「あら、この町には私たちしかいない。テルルは私の弟で、私の言うことを聞くわ。ということは、この町で一番偉いのは私ってことじゃないの？　その私が言ってるのよ。誰も文句言わないわ。それに、勝手にズカズカ人様の土地に入ってきておいて、発言権があるとでも思ってるの？」

「でもそのドレスは僕のものじゃない！　預かりものなんだ！　宛先人がいないならおばあさんに返さないといけない。少ないけど、

お金なら出すから……」

「あのねぇ、あなた話聞いてたの？　私は町から出たことがないって言ってるでしょ？　そんなお金なんて、この町じゃそこら辺の石と同じよ。服の方がよっぽど価値があるわ」

「お願いだ。なんとかその服以外のものにしてくれよ。そうだ、家中掃除するさ。水だって汲むし、なんなら僕の帽子をあげてもいいよ」

「知らないわ、あなたの事情なんて。あと、いらないわよ、そんな変な帽子」

「変とは失礼な！　これは僕のお気に入りの……」

「知らないって言ってるでしょ。これ以上ぐだぐだ言うならふっ飛ばすわよ！」

彼女は銃を構えた。ポセットの両手がピンと伸びる。

「ねぇ、頼むよ」

「あなた、なんでそんなにこのドレスが大事なの？　人のでしょ？　無くしたってあなたが損するわけじゃないわ。おばあさんにだって黙っていればばれないのに」

「そういう問題じゃないんだ。約束は守ることに意味があるんだから」

彼女はポセットの目をじっと見た。ポセットも視線を真っ直ぐに

返す。

ため息交じりに、彼女が折れた。

「わかったわよ。ドレスはあきらめるわ」

「本当？」

ポセットの顔が明るくなる。

「ただ、しばらくこき使ってやるから、覚悟しなさいよね」

「えぇっ！」

ポセットはしぶしぶ了解した。そういうことで話がついたようだ。ナットは眠りかけていた。

「終わった？」

初めて口をきいた猫を睨んで、彼女は不敵な笑みを浮かべる。

「あと、この黒い猫は今日の晩御飯にします。さっそく水汲んできて。猫鍋よ」

「んにゃアホな……」

「わかった」

「えぇっ！　わかっちゃうの！？」

かくして、廃墟の町の真ん中の、植物に囲まれた古小屋で、謎の姉弟との短い生活が始まった。

「遅れたわね。私は？スズ？。テルルの姉よ。よろしく、ポセットくん」

スズの放つ堂々たる威厳は、国を治める女王を思わせた。

その9　廃墟の女王（後書き）

つづく。

その１０　三日目の朝

さて、ポセットがこき使われ始めてから、早くも二日が過ぎた。現在、三日目の朝。日も見えない早朝。

「ふあぁぁ……」

欠伸混じりに水を汲む。小屋の裏に井戸があり、そこから桶で水を引き上げるのだ。透き通った水が、朝の体を刺すような寒さに拍車をかける。

冷たい水で顔を洗えば、眠気などいとも簡単に吹き飛んでしまう。ただ、体に悪い冷たさなのが気になる。

水を小屋に運び、用意されている薪を使って火をおこす。火が大きくなったら、湯を沸かす。

お湯が沸くまでの間に、濡らした雑巾で部屋の中を掃除。テーブルや床などはもちろん、スズは窓の桟などの際どいところまでチェックしてくるので、気が抜けない。

そうこうしていると、湯が沸いたようだった。エプロンを着け、朝食の調理に取りかかる。今日のメニューは、昨日採ってきた野草の盛り合わせと、捕まえた鴨の肉でこしらえた鍋料理。料理をしたことのないポセットにとって、?煮る?という方法は大変便利かつ唯一の方法でもあった。

少量しかない調味料を節約しつつ、味付けをこなす。

「――うん、おいしい！」

できあがり。

日も出てきた。まもなく二人とも起きてくるだろう。昨日は初日ということもあってか、お茶がぬるい！　と、スズの逆鱗に触れてしまい、酷い目にあったので、今日はしっかりしなくては。

テーブルに料理を並べる。ほかほかと湯気が立ち、なんとも美味しそう。自分で作ったということもあり、まるで我が子のよう。

「ああ、なんて美味しそうなんだ。美味しいって言ってくれるかな？　テルルくんは肉料理が好きって言ってたから、きっと気に入ってくれるだろうなぁ。スズはどうかな、お湯も温めてあるし、熱いお茶がだせるぞ」

こうして一通り朝の用事を済ませた。その日暮らしのポセットには、朝食の用意というものはとても新鮮で、楽しさすらあった。

しかし、エプロンをたたむと急に我に返って、熱も冷めた。

「そもそも、なんで僕が朝ご飯を……」

「あたりまえでしょ。不法侵入者なんだから」

スズが寝室から出てきた。長い銀の髪がめちゃくちゃになっているが、手で何度かガシガシ梳くと、さらりと流れるストレートになった。

「不法侵入って君は言うけど、ここに僕を連れてきたのはテルルくんであって……」

「ぐだぐだ言わないの。ふっ飛ばすわよ」

問答無用。

スズは掃除チェックをして、それから椅子に座った。

「さて、まずかったら承知しないわよ」

スズはバクバク食べていく。ポセットの分も結局半分ほど食べた。

「あぁ、僕のご飯……」

「ちょっと！　茶が熱いわよ！　ふっ飛ばされたいの？」

朝からぷんぷん怒るスズ。ポセットは早くも疲れ始めていた。

「食べたら食器片付けて、洗濯物お願いね。あと、干した洗濯物を取り込んで、たたんで、しまうの。わかった？」

言われた通りにするほかない。おばあさんのドレスは入場料分働くまでどこかに隠されていて、返してもらえない。

「どのくらい働けばいいのさ？　僕はそういつまでもここにはいられないんだ」

ポセットがうんざりした様子で言う。スズが答えるのには時間がかかった。

「そのうち、飽きたら返してあげるわよ。それまでしっかり働きなさい」

「なんだよ、飽きたらって……」

「テルルを起こしてくるから、あなたは薪を燃やして暖をとって。朝は寒いわ」

静かな小屋の中。ポセットは昨日のことを思い出していた。

昨日は一日中、旅の話を延々語らされた。大きな風車の回る町、紛争の絶えない町、命からがら谷を越えたときの話や、山賊に襲われた時の話……。

「外って……、そんな怖いところなんだ……」

夢を壊すような真似をして、テルルには悪いことをしたと思う。町から出たことのないこの二人にとって、旅とは自由の象徴であるようだった。

「どのみち、町からは出られないわ。テルル、聞きたいことがあったらなんでも聞いておきなさい。損はないわ」

そう言っていたスズの目は、ポセットにさりげなく合図を送っていた。ポセットはよく覚えているし、スズの合図が何を表わすものかもわかっていた。

テルルは、町から出てはいけない。出られない。なぜかは知らないけど。

スズが寝室への扉に手をかけた。ポセットが呼びとめる。

「もしかしてだけど、テルルくんは、何か病気なのかい？」

スズは手を止め、驚くでもなく、悲しむでもなく、平然と振り向き、淡々と、そうよ、と言った。

「夜と朝、一日に二度、薬を処方しないといけないの。それも、治すための薬ではないわ。長らえさせているだけのもの。いつかあの子は……。それも、そう遠くない日……」

「なんて、病気なんだい？」

「詳しく言うなら、病気じゃないわ。それに、あなたに言って何になるの？　誰にも治すことなんてできないのよ。あなたをここに留めているのは、家事が楽になるってだけじゃないわ。旅を夢見るあの子に、諦めを着けさせてほしいからなのよ。あの子は、この町を出て生きていくことはできないの」

「それは、大体察したよ。テルルくんは、どうしても町の外に出てみたいようだったから」

スズは悲しげに視線を落とした。

「あの子に、外の世界を見せてあげたいわ。でも、それは無理。魚に、山からの眺望を見せてあげたいって、そう言ってるのと同じよ。連れて行くことは出来ても、あの子はきっと、二度と帰ってこられないもの」

「外の世界を諦めさせるために、旅人を使うなんて、考えたね」
「別に、初めからそのつもりだったんじゃないわ。都合よく、そうなったのよ。あなたも協力してちょうだい。テルルが諦めたら、あのドレスも返すわよ」
スズは扉を開け、寝室に消えた。ポセットの背後で、ナットが大あくびと一緒に起きた。
「むにゃ？　ポセット、早いね」
「ああ、よく眠れた？　ところでナット、ここから出るためには、旅の嫌なところを紹介するといいらしいよ。何か思いつくことあるかい？」
ナットは前足を大きく出して、ぐいーっと伸びた。
「不味い保存食を食べなきゃいけないところかな」
「――もうお前には分けてやらない」

その１０　三日目の朝（後書き）

つづく。

その１１　五十年前の記録

テルルはとても元気で、病を患っているとは到底思えなかった。

「ポセットくん！　木の実採りに行こう！　町の方に大きな木が生えてるんだよ」

テルルはバタバタと走りまわり、大きな籠を抱えると、あっというまに植物の迷路へと飛び込んで行った。

後を追おうとするポセットに、スズが声をかける。

「くれぐれもよろしくね。外に連れ出してって頼んできても、絶対断って」

「わかってるよ。まかせて」

ポセットとナット、そしてテルルの二人と一匹は、迷路を抜けて、町へと辿り着いた。

「こっちだよ！」

テルルに連れられて、廃墟の町を進む。行き着いた場所には、大きな木が生っていて、わざわざ実が採れるように何本も添え木などの工夫がされていた。そして傍には、テルルと名前の書かれた看板がたっていた。

「これ、もしかして育てたのかい？」

「そうなんだ！　よくわかったね！　僕が自分で植えて、育てたんだぁ。まさか実をつけるなんて思ってもみなかったんだけどね」

テルルは落ちていた木の棒で、実をつつく。

「向こうにもあるんだよ。ポセットくんは、そっちのを採ってきてくれる？　他に食べられない実も近くになってるんだけど、食べられるやつには近くに看板がたってるからさ。すぐわかると思うよ」

ポセットはテルルの指示に従って、入り組んだ廃墟の町の中へと入って行った。そこはコンクリート敷きの広いホール。中は冷たい暗闇に満たされていたが、唯一天井には大きく穴が開いていた。冬も近いというのにもかかわらず命の漲る一本の大きな木が、差し込む日光にライトアップされている。

傍には、一本の看板がたっていた。テルルと書いてある。

「これか。美味しそうな実だ」

「いい匂いするね」

実をいくつか採った。服をお腹で袋のようにして、たくさん積んだ。

「まだあるよ、ポセット！　たくさんとっていこう！」

「こら、ナット、そんなに積むな！」

袋からこぼれおちた実が、ころころころころ、と床を進む。

恐らく崩れた天井の破片なのだろう、辺りに散らばるコンクリート片。木の実はそれらに触れることも無く、見事な安全運転を見せて、物欲しげに開く四角い扉の跡から、隣の部屋へと消えた。

「ナット、とってきてくれよ。僕は今しゃがめないんだ」

「わかった」

ナットがひょこひょこと音も無く闇に消える。ポセットは天井の穴から秋晴れの空を見上げた。頼りない雲が点々と空を行く。

「ポセット！　ちょっときて！」

ナットの呼ぶ声。木の実を落とさないように慎重に進む。隣の部屋はまっ暗闇で、黒猫であるナットはもはや影も形も無かった。

「かくれんぼかい？」

「違うよ！　入ってきてよ！　なにかありそうなんだ！」

声を頼りに進む。目が慣れるまでは少し時間がいるだろう。両手で服の端をつまみ上げているので顔をかばえない。顔に何か当たるかも、という本能的な恐怖が沸きおこる。

「どこだよ、ナット」

「こっち、こっち！」

「どっち？」

ぎゅむっ。

「ぎにゃあああぁぁぁ！」

どうやら、尻尾を踏んだようだ。怒るナットがどこに居るのかわからないが、取りあえず感触のあった足をさっと上げる。

「ごめんごめん。痛かった？」

「気をつけてよ！　もう！」

「だって見えないんだよ」

ようやく目が慣れてきた。どうやら、ポセットとナットの前には扉があったようだ。扉には何枚もの板が打ちつけられていて開かない。

「これがなんだっていうんだよ？」

「何かありそうじゃん！」

「言っておくけど、宝物なんてないからな」

見えないが、ナットの髭がピンと伸びたようだった。

「でもほら、ポセットだって、なんで町が廃墟になったのか、とか……。いろいろ疑問に思ってることあるでしょ？」

「――確かに、疑問は多いよ。廃墟になった原因も知りたいところ

だね。それに、なんであの姉弟だけが残っているのか……。あと、初めの日にテルルくんが言っていた、？あいつ？っていうのも、気になるね」

「もしかしたら……」

「あぁ、不思議な町だ。もしかしたら、僕の？失ってしまった記憶？と関係があるかもしれない……。確かに、ちょっとはそう思ったよ」

「でしょ、でしょ！」

「でもそれはちょっと思ったってだけで、確実性なんて皆無だよ。薄い希望に賭けてその扉を打ち破るのは難しいことじゃないけど、後で木の実を全部拾い集めないといけないんだぞ」

袋を作る両手をぷらぷら揺らす。が、ナットには見えていない。

「大丈夫、大丈夫！」

「――しょうがないな」

ポセットはゆっくりと屈んで、なるべくそっと実を置いた。

「よし、行くよ」

扉に体当たりを試みる。二回、三回……、八回目で板が崩れ、扉がはずれ、ポセットは向こう側へ倒れ込んだ。

「いったたた……。ん？」

埃が舞い上がる。塞がれていた部屋にはいくつか窓があったが、全て今の扉と同じように、板が打ちつけられていた。

扉を塞いでいた板の破片を使って、窓の板をバキバキと取り去っていく。全ての窓から光が差し込む。いくらか部屋の中が明るくなった。

「ごほっ！　あぁ、埃っぽい」

涙ぐむポセット。その背後で、ナットが壁を見上げて、驚愕の声をあげた。

「なにこれ！」

「どうした、ナット？」

ナットが見つめる壁には、大きな絵が飾ってあった。朽ちかけた額縁にはめられ、ところどころ虫食いが進んでいる。

家族の絵のようだ。椅子に腰かけたおばあさん、その両隣に立つ男性と女性、さらに女性の隣には、二人の子供が立っていた。

「これは……」

母親と思わしき女性の隣に立つ二人の子供。どれくらいの歳なのだろう。ポセットは、その幼い顔に見覚えがあった。

幼き日のスズとテルル。そう、間違いない。

「ポセット！　これ！」

ナットが何やら紙の束を咥えてきた。近くの戸棚が倒れ、散らばっていたのを揃えてきたのだ。まとめて、目を通す。それは書類のようだった。

「なんて書いてあるの？」

「うぅん……、汚れてて読めないところがあるから……。それに、なんだか難しい話だなぁ。何かの研究資料みたいだけど……」

そう言って、ポセットはもう一度壁に掛けられた絵を見上げた。

「でも、どういうことなのかな」

「見当もつかない」

やがて、遠くからポセットを呼ぶ声が聞こえてきた。テルルだ。ポセットは急いで部屋から出て、ポセットを探していたテルルと合流した。

「なんだ、ポセットくん、場所わからなかったの？」

「え？　あ……」

慌てて出てきたので、実をもってくるのを忘れていた。場所が分からなかったということにして、早く帰ろうと促した。

「おねぇちゃんに怒られるよぉ～？」

テルルは楽しそうに駆けて行く。その背中は、病気を微塵も思わせることなく、若い力に満ち溢れていた。

ナットが小さく言った。

「ポセット、あの絵が本当だったらさ……」

絵の端には、描かれた日付が書かれていた。それは、今から大体、五十年ほど前のものだった。

「あの姉弟、何者なんだろうね」

ナットの口調は淡々としていて、人事もいいところだった。特に興味もわかないのだろう。人が何十年生きようが、ナットには知ったことではない。ナットのそういうところも、ポセットは分かっていた。

「この町には、思っているよりもっと大きな秘密が……、あるのかもしれないな」

ポセットは一人、わくわくと心が高鳴るのを感じていた。

その１１　五十年前の記録（後書き）

つづく。

その１２　息はある……けど

その晩、テルルはいつも通り睡眠薬を少量飲み込み、その後病気の薬だという小さな錠剤も飲み込み、空気が抜けるように眠りについた。

「これで、いいのかな？」

任されていたのはポセットだった。先ほど、スズが突然ポセットに薬を渡して、こう言ったのだ。

「今日木の実を採ってこなかった罰として、あなたにはテルルに薬をあげる仕事もしてもらうわ。まず睡眠薬、その後病気の薬の順番で飲ませるのよ。いい？　絶対にテルルに悟られちゃだめよ？　睡眠薬でも病気の薬でもなくて、ただの栄養剤！　そう通して」

そう難しいことでもないし、了解したポセットだったが、どうにも腑に落ちない。

「そこまで念を押すなら、自分でやればいいのにね。別に、大変な仕事でも何でもないのに」

ポセットはリビングに戻った。テーブルの上で、ナットがふわふわと丸くなって寝ていた。その横では、スズがテーブルに突っ伏して、すうすうと寝息を立てている。

起こさないように気をつけながら、椅子に座る。ぎぎぎっと大きな音がなった。夜の静けさの中では、より大きく聞こえる。

「む……んぅ？」

スズが眉をひそめて、もそもそと顔の位置を変える。ポセットの背に冷や汗が伝う。

「んん……。すぅ……すぅ……」

どうやら、起きはしなかったようだ。ほっとしつつ、今度は音をたてないようにそっと、そ～っと立ち上がる。ソファに腰掛け、天井を見上げる。頭をめぐるのは、朝に見たあの絵のこと。

「五十年も前の絵……」

チラリとスズを見る。やはり、あの絵は幼き日のスズとテルルに違いなかった。しかし、五十年前にあの姿だった彼女が、今現在この姿であるはずがない。

「案外、ただのそっくりさんだったりして」

そしてあの時書類を見つけたのを思い出し、鞄に手をかけた。ぐいっと強く引っ張るも、鞄の紐がビーンと張るだけで、鞄は床から離れようとしない。鞄と床が超仲良し。

「おっかしいな……」

続けてぐいぐい鞄を引っ張るが、相変わらず仲良し。とうとうムキになって思いっきり引っ張ると、あろうことかスズの座っている椅子がダイナミックに横転し、すごい痛そうな音を立てて、スズと椅子が床に伏した。

「……。あわわ……」

さーっと血の気が引いて行く。どうやら、スズが座る椅子の足が鞄を噛んでいたようだ。しかし、なんという有様だろう。あんまりうるさいので、ナットが起きた。

「なに？　爆撃？　不発弾でも埋まってたの？」

ポセットは大慌てでスズに駆け寄る。きっと怒っているだろう。

そうだナットのせいにしよう、とそんなことを考えながら、スズの頭をおこす。スズはまるで死んでしまったかのようにぐったりと動かない。寝ているのか、それとも本当に……。

見た目、怪我はないように見える。

「スズ、大丈夫？　スズ、スズ！」

いくら呼んでも返事がない。目を固く閉じたまま、人形のように横たわっている。

「スズ！　――どうしよう、頭を打ったのかも……」

ポセットに医学の知識はない。下手に動かせなかった。口に手を当てる。どうやら、息はしているようだ。死んではいない。

念のため脈を確認しようと、スズの手首に指を添える。

「……」

異変に気がついたのか、ナットがテーブルから降りてきた。心配そうにスズの顔を覗き込み、次にポセットの顔を見上げる。

「し、死んじゃったの……？」

「いや、どうやら死んではいないようだ。息はしているよ」

ただ……。ポセットはスズの白く細い腕をとり、手首をさすった。あまりにも白い。青くすらある。

サラサラと流れるようなスズの銀の髪を分け、同じく真っ白な首筋に指を添える。

「なに？　どうしたの、ポセット？」

「こんなことがあるものなのだろうか……。スズ、息はしているのに、脈がないんだ」

「えぇ？」

そして、その白い肌は、まるで雪で出来ているように冷たかった。

ポセットは初めてこの町に来た時のことを思い出した。

「そういえば、テルルくんの手も驚くほど冷たかった……」

「冷え性なんじゃないの？」

「首まで冷たいなんてことがあるか。大体、脈がないなんて……」

ポセットは何度も脈を探る。しかし、ピクリとも感じられない……。

その１２　息はある……けど（後書き）

つづく。

その13　誤解

五十年前の絵に描かれた姉弟。まるで人とは思えない体温。おまけに脈がない。そんな姉弟が、廃墟に二人きりで住んでいる。

スズは目を覚まさない。

「なんなんだこの状況……。おばあさんのドレスをとり返すだけのはずが、こんなことになるなんて……」

ポセットはスズの心音を確かめようと、胸に手をあてた。しかし厚着なのか、ちっとも感じられない。一番上にきているもこもこの上着をめくって、もう一度手をあてる。感じられない。

ナットがぎょっとする。

「え、ちょ、ちょっと、ポセット？　何してるの？」

「心音がない……。まったく鼓動が感じられない……。まさか……心臓が……」

ポセットはさらに服をめくろうとする。ナットが慌ててポセットの手に掴まる。

「ななな、何してるの、ポセット！　どうしたの！？」

「どうって、心音が感じられないんだ！　息はしてるのに、心臓が止まってる？　そんなことあるもんか！　何かおかしい、どうなっ

てるんだ？　肌は石みたいに冷たいし、肌の色も青白い、これじゃまるで……」

「死人のようだって言いたいの？」

「え？」

ポセットの視線が落ちる。スズが凄まじい形相でポセットを睨んでいた。

「人の上で随分縁起の悪いこと言ってくれるじゃないの。そもそも私、椅子に座ってたはずなんだけ……ど……？」

倒れた体。抱える少年。開いた上着。伸びる手、胸元。

「あ」

ポセットも、ようやく気がついたようだった。ナットが逃げ出す。

「き、きゃあああああああっ！」

バシバシバシバシ。見事なビンタが嵐のようにポセットを襲う。

「なにするのよ！　なにするのよ！　え、え！？」

スズは立ち上がり、ポセットと距離をとる。完全に混乱している。ちなみにポセットも混乱している。

「えええええっと……、違うんだ！　誤解しないで！　これはその……」

「あぁ、そういうことだったのね！　わかったわ。わかった、本当よくわかった！」

「ちょ、ちょっと待って、僕は君が勘違いしてるように思えてならない」

「何も勘違いしてないわよ。へぇ、そうなの。あなたって……へぇ、そうなの！」

「ち、違う、きっと違う！」

「やかましいわよ！　離れなさいよ、この変質者！　ケダモノ！」

スズの細く白い指は、まるでつららのように鋭く見えた。目を狙ってくる。

「痛い痛い！」

「あ、あなた、ちょっと気を許したからって……！　もう信じないわ！　絶対許さない！」

「ま、待って！　僕は、えっと、何と言えばいいか……。ただ君の身体が気になって……」

「な、なんですって！」

「ポセット、語るにおちてるよ。マズい、それ以上言うと本当にマズい」

「じゃあ、何て言えばいいんだよ！」

ナットが怒りに震えるスズの前に立ちふさがり、震える声で言った。

「ポ、ポセットは別に、変なつもりでああいう行動に出たんじゃないんだ！　信じて！」

「どこをどう信じたらいいのよ！　完全に確信犯でしょ！」

「違うんだよ！　ほら、ポセットだってそんなつもりなかったんだ！　だよね？」

「あ、あたりまえだろ。よく考えてみてよスズ、僕が君の胸に触ってなんのメリットが……？」

「そんなの想像したくもないわ！　――じゃあ、いいわ。ちょっと信じてあげるわよ。それで、どんな公正な目的があっての行動だったのかしら？　私の胸に、よっぽどの何かがあったのかしら？」

スズは怒りでひきつった顔を精一杯笑顔にするので、余計に怖い。泣く子も黙るだろう。むしろ泣きやんだ子も泣き出すだろう。

「君の胸にあったもの……？」

ナットが後ろ目でポセットに合図を送る。下手なことを言うな！　言葉を選べ！　ポセットも承知のことだった。とにかくここは、スズを怒らせないように、余計な面倒が起きないように、心音の話も、体温の話も、完全に無かったことにしよう。そう思った。

「い、いや、別に何もなかったよ」

グサッ。

スズの心にトゲが刺さる音が聞こえた気がした。スズは青白い顔をさらに青くしてうなだれた。

「な、何もなかったってあんた……」

別に小さい胸がコンプレックスなわけではない。別に、そんなこと全然ない。……と、自分に言い聞かせる。

ポセットが続ける。

「うん、何もなかった」

グサグサグサッ。

スズの心はすでにボロボロだった。

「ちょっとはあるでしょーがぁ！」

突然泣き出すスズに、ポセットはもうどうすればいいのか……。

半ベソのスズの怒りはもはや、その身を取り巻く灼熱の炎が幻想となって浮かびあがるほど激しかった。

「ま、待って！」

ポセットは腹を決めた。

「真の犯人は……その……。ナ、ナットだ！」

「にゃっ！？」

スズは足元のナットをギロリと睨んだ。ナットが蛇に睨まれた蛙のごとく固まる。毛が逆立って、冷や汗がだくだく流れて水溜りになる。

スズは静かに言った。

「そんなのどうだっていいのよ。あなたも猫も、ボコボコのズタズタのグシャグシャにしてやるわ」

「ズタズタ！？」

「グシャグシャ！？」

人を打ちのめす例えとしては、あまりにも行き過ぎた表現ではないだろうか。ポセットもナットも、想像しそうになったのをなんとか振り払った。

「落ち着こう……。ひとまず落ち着いて……」

「うっさい！」

スズはバタバタと寝室へ入って行った。それは突拍子もない行動で、てっきり殴りかかってくるかと思っていた一人と一匹は呆けたように立ちつくした。

「なぁんだ。なんとかなったね、ポセット。拗ねて寝ちゃったよ」

「いや、違う」

「え？」

扉を開けて、半ベソで銃を片手に出てきたスズを見たときのナットの叫びと言ったら、これからギロチン処刑でも受けるかのような、それはもう聞くに堪えないものだった。

その１３　誤解（後書き）

つづく。

その１４　思い渦巻く四日目の朝

四日目の朝。

外はろ過した空気で満ちていた。今にも落ちてきそうな空は実に深い色合いで、昨晩の命がけの鬼ごっこで疲れ果てたポセットの心を鮮やかに洗ってくれる。

「ふぇ……」

朝はとても冷える。ポセットのくしゃみは鉄の鐘を叩き割ったかのような轟音になって、町に広く響いた。

「昨日は何があったの？」

テルルは弾丸で穿たれた壁の穴を指でなぞる。振り向いた視線の先には、吹き飛んだドアを直すポセットがいた。

ポセットはちぎれた古釘をペンチで引っこ抜き、なんとか無事だった蝶番を新しい釘で打ち付ける。ナットが新しい釘を咥えて、ポセットに渡す。

「ちょっとした誤解だよ。スズが怒りだして、銃を乱射するんだもん。迷路に入ったらとても勝てないから、小屋の周りをぐるぐる逃げ回ったんだ」

「どうりで、家の中も外も、穴だらけなわけだね」

「スズはどうしてるんだい？」

「まだ寝てるよ」

「しかし、そんなに怒るようなこと言ったかなぁ……？」

寝室のベッドの中、スズは眠れないまま過ごしていた。いつの間にか外は明るくなり、彼が叩くトンカチのリズムだけが静まり返るこの寝室に響く。

スズ。スズ。

昨晩のこと。深い眠りの中。自分の名前を必死に呼ぶ彼の声を思い出す。

これまではいつも、テルルとしか一緒にいなかった。なので？お姉ちゃん？とは呼ばれ慣れていても、？スズ？という呼ばれ方は変な感じだった。

いや、変というのは少し違う。？テルルの姉？という呼び方ではなく、個人としての呼び名で呼ばれたことが……。

ただ慣れていないだけなのだろうか。

「スズ……」

何度も何度も、言い聞かせるように、深い沼から引っ張り上げるように呼んでくれた。

「何よ」

一体なんなのだろうか。

スズは自分の胸に手をあてた。昨晩、ポセットがなにもないと言ったこの胸。確かに、何もない。それは、姉弟だけの秘密であり、呪わしい現実。

失ってしまったはずの心臓。それが再び動き出したように、体が鼓動に包まれる。

トンカチの音で確かめる彼の存在。願わくばその音を止めてほしかった。

いや、やっぱり止めてほしくない。ずっとそうしていて欲しい。

スズはゆっくり体をおこして、銃に弾を込めるのだった。

直したドアは傾き、塞いだ壁は不格好。割れた窓はカーテンをひいてごまかした。

「これでいいかな」

テルルは悪戯っぽく笑った。

「よくはないと思うよ。ポセットくん、結構窮地にいるもん」

「やっぱりそうかな」
「猫くんもね」
「うにゃぁ……」
ナットがうなだれる。
「どうしたら許してくれるかなぁ……」
テルルがここぞとばかりに身を乗り出す。
「逃げちゃわない？　僕が道を教えてあげるよ」
「え？」
テルルの作戦が始まった。

静まったトンカチの音。寝室の扉を開け、スズがリビングへと出る。
「ちょっと。修理終わったの？」
誰もいない。テーブルには書置きが残してあった。
「なになに……？　ポセットくんと木の実をとりに行ってきます……？」

昨日採ってきたではないか。不審に思ったスズだったが、ポセットが採ってこなかった分、昨晩のお詫びとして採りに行ったのだと考えれば、そう無理のない話だった。

姉という鎖からの解放。テルルの作戦は、すでに半分成功していた。

その１４　思い渦巻く四日目の朝（後書き）

つづく。

その15　テルル

冷たい風が空を曇らせる。まるで自分の心を見ているような気分になって、ポセットは視線を下ろし、テルルの背中だけを見つめた。

「こっちこっち、早く早く！」

テルルは生き生きと走って行く。元気。そう、元気という言葉がふさわしい。

「昨日も思ったけど、テルルくんは本当に病気なのかな」

「でも、体温がないんでしょ？　病気なんじゃないの」

「そうだ、動けば熱をもつだろう。うんと走って、確かめてみよう」

ポセットはテルルを追い越し、走って行く。テルルも負けじとスピードを上げる。

しばらくして、植物の迷路を抜けた。崩れた町を駆けて行くと、先日テルルと初めて会った広場に出た。テルルが膝に手をついてぜぇぜぇと荒い息をする。

「ポセットくん……、はやいよぉ……」

「テルルくんも速いじゃないか。ちょっと意外だったよ」

そしてさりげなく、テルルに手を差し出した。テルルはポセット

の手を握り、グイッと体を起こす。
「む……」
やはり、冷たい。
硬い表情のポセットに気がついたテルルが慌てて手を放し、苦笑いをした。
「僕、ひどい冷え症でさ……」
「姉弟そろって、首まで冷たいのかい？」
「え……」
テルルの表情が、とても寂しそうに見えた。ナットはその顔を、どこかで見たことがあるような気がした。
「なんで……？」
「スズには、心音もなかった。それも姉弟そろってなの？」
ポセットは強引に話を進める。スズはきっと何も言わないだろう。話を聞きだせるのはテルルだけであり、今はその絶好の機会なのだった。
「実は昨日、建物の中で絵も見たんだ。――君たちは一体……」
「知りたい？」

テルルは精一杯の笑顔をつくったようだった。ゆっくりと歩き始めて、同時に口を開いた。

「きっと、驚くと思うよ。そして、怖がると思う」

テルルは振り向くことなく、荒廃の町を進んでいく。ポセットが呼んでも見向きさえしない。

ポセットはやむなく、テルルを追って歩き出した。

「ポセットくんが言ってる低体温と無心音。それも僕たちの身体の異常のひとつだよ」

「じゃあ、やっぱり……」

「うん、僕たちには?心臓?という器官が存在していないんだ。血も通っていない。だから体温も低いし、肌の色も白い」

なるほど、筋が通った話だ。納得。……などと簡単に頷ける話ではない。

「心臓がない人なんているもんか。心臓がなかったら、死んでいるのと同じだ」

「そうだね。僕は死んでいるのかもしれない」

その妙に落ち着いた態度は、不気味ささえ感じさせた。

「どの道、僕はもう駄目だ。体がもたない。お姉ちゃんは必死に隠してくれているけど、わかるんだよ。自分の身体の事だからね。毎

夜飲んでる睡眠薬だって、夜中に体の痛みで起きないように、痛みを知らせないためにするものなんだ」

足が速くなる。気がつけばもう、相変わらず今にも崩れそうな、あの町の門まできていた。

「その薬だって、お姉ちゃんがわざわざ?あいつ?に頼んでもらってきているんだ。あんなやつに、お願いしますって……。頭を下げるんだ……」

テルルは唇をかんだ。拳を握り、怒りを抑える。

「?あいつ?……」

初めの日にも言っていたその人物。尋ねる暇も無く、テルルは何かに追われるように、一心に歩いて行く。

やがて、門の真下に入ると、テルルは足を止めた。

「ここから先に、僕は出たことがない。出てはいけない……」

「どうしてだい?　君は、とても元気に見えるのに」

「息が出来ない」

「息?」

テルルは深呼吸をして見せた。大きく吸って、美味しそうに深く深く吐いた。

「息が出来るのは、まだ肺が生きているからなんだ。これ以上先へ行くと、僕の肺はあっという間につぶされて、痛みは感じないかもしれないけど、呼吸はもう二度と出来なくなる。僕は多分、死んじゃうと思う」

テルルは振り返る。あの寂しそうな顔で。

「僕の身体には悪魔が住んでるんだ。悪魔が居ないと僕は生きられない。でも、悪魔なんていなかったほうがきっと、みんな幸せだったんだ」

ナットは、その寂しそうな顔をどこで見たのか思い出した。

「ポセットが、自分の話をするときの顔と、一緒だ……」

門の向こうでは、金色のススキが風に波打っていた。

「でも……。僕はそれでも、見てみたいんだ」

ふわりと風が吹いた。錆の匂いに交じって、潮の香りがした。ポセットもナットも、初めて町に来たときに見た、広い海を思い出した。

「ポセットくん、僕を連れて行ってくれない？　道わからないんだ。あと、終わったあと僕を町まで持ってきて欲しいしね」

「どこに……行くんだい？」

そう尋ねたが、ポセットはすでに答えを知っていた。テルルは振り返って笑った。

「泳ぐの、結構得意なんだよ、僕」

気持ちの重さが、そのままポセットに降りかかった。何もわからない。どうすればいいのか、見当もつかない。正解が欲しい。どうしたらいい？

葛藤は尽きない。正解はだれにもわからない。しかし、ポセットは僅かな、本当に僅かな希望に賭けた。

でもそれは、もしかしたらとても自分勝手な行動で、正しい行いではないのかもしれない。

奥歯を噛みしめ、不思議なままの悔しさを噛み砕いた。きっと期待に溢れているだろう彼の顔を見ることなく、ポセットは右手だけを静かに、的確に、有無を言わさず突き出した。

「――行こう」

乾いた破裂音。焼けた金属の臭いが不快に漂った。

その15　テルル（後書き）

つづく。

その１６　廃墟の古小屋

小屋の近くまで来た。道がわからないので、植物の迷路を直観と僅かな記憶を頼りに進むのは大変骨は折れたが。

温かい匂いがする。今朝直したドアを引いた。

小屋の中では、スズがコトコトと鍋でなにやら煮込んでいた。

「あ、あんた！　ちょっと……、今までどこ行ってたのよ！　……え？」

ポセットの背には、ぐったりと力なくうなだれるテルル。目は閉じたまま開かない。スズの顔がみるみる険しく歪み、殴りかからん勢いでポセットに迫った。

「出たのね……、町から……。なんてことしてくれたの！　テルル……、テルル！」

「落ち着いて。テルルくんは気を失っているだけだよ」

ポセットは寝室へテルルを運び、ベッドに寝かせた。彼の首に残った小さな火傷の跡が、ポセットの心にチクリと刺さる。

小屋に帰ってきたときのことを思い出す。

「彼は、命に代えても外へ行きたい、そう考えているみたいだ。ごめんね、手荒なまねして。でも、こうするのが一番だと思ったんだ」

ポセットはスズにトンファーを見せた。握りにつけられたダイアル式のボタンを押すと、仕込まれたスタンガンが紫の火を散らせた。

「そうだったの。ありがとうね、止めてくれて」

「それが、よかったのかどうか、僕にはわからない」

「とにかく、作った晩御飯が無駄にならなくてよかったわよ。今日はこの子の好きな、シチューを作ったんだから……」

ポセットは寝室を出た。リビングのテーブルには、スズが作ったシチューがほかほかと湯気を立てている。

「ポセット、遅いよ！　早く！」

シチューを前に尻尾をいらいら揺らすナット。スズもテーブルについている。ポセットはそっと椅子に腰かけた。

「ごめんごめん。それじゃ、いただくよ、スズ」

「ええ、どうぞ」

出来たてのシチューは、ナットのぺこぺこのお腹を十分に満たしてくれる。

「そんな急がなくても、まだあるわよ。――おいしい？」

「おいしい！」

「ナット、耳だけじゃなくて、鼻まで白くなってるぞ」

ナットは鼻を前足でごしごしして、またシチューを食べ始めた。次に顔をあげたとき、やはり鼻は白くなっていた。

「――で、テルルから、どこまで聞いたの？」

スズは一人コーヒーを入れて、まったりと飲み始めた。スズの身体には大きすぎるカーディガンが、スズの手元をすっぽりと隠していて、スズの腕にカップが吸いついているように見えた。

「君たちの心臓の話と、あと……テルルくんは薬の正体を知っていたよ」

「――そうだったの。まぁ、完全にばれてないとは思っちゃいなかったわ。とにかく、心臓の話は知ってるのね。――ホントにそんな話、信じてるの？」

スズは嘲笑気味に尋ね、コーヒーを啜った。

「うん。実際、君には心音がなかったしね」

「あら、昨日の話？　良い言い訳を思いついたのね」

「君たちの肌の白さや冷たさは、とても生きている人間のものとは思えない。にわかには信じがたいことだけど、旅をしていると、時たまそういう常識を超越したような人がいるもので」

「あら、そ」

スズはずずっとコーヒーを飲み干すと、半ば睨むようにポセットを見た。

「率直に言うと、テルルの言ったことは本当のことよ。私とテルルには心臓がないわ」

「一体どうして？　それに、なんで君たちは……」

「どうして生きていられるのか、でしょう？　話すと長いし、あなたに言っても別に何もないから、とても面倒なんだけど」

スズは開いた寝室の扉からのぞく、テルルの寝顔を見つめた。

「でも、まぁ。テルルもあなたのことを気に入ったみたいだし、あなたじゃなかったら、テルルを外に連れ出して、今頃テルルはここにいなかったかもしれない。何より、テルルはもう自分の命に絶望してるのね。それを救ってあげられないのはとても悲しいわ。悲しい分、最後に、町の外を見せてあげたいとも……思うわ」

何やら考えたように目を閉じ、キッとポセットをみる。

「あなたと、こういうタイミングで出会ったのもきっと何かの縁ね。あなたに、私たちの秘密を話すことにするわ」

「スズ……」

スズは口を開いた。しかしそれは大きな欠伸であり、ふあぁぁぁっと声を出すほど存分に空気を吸うと、スズは立ち上がってのそのそ寝室へ向かって行った。

「え、ちょっと、スズ？」

「今日は眠いから、明日話すわ。お皿、洗っといてね。おやしゅみ……」

完全に口が回っていない。相当眠いようだ。

「お、おやすみ……」

ポセットは静かに皿を洗った。鼻の頭をシチューで真っ白にした相棒の黒猫はすでにすうすうと寝入っており、実に幸せそうだった。ポセットもソファに横になった。

しかし、気になるところで話しを切られた。なんだか、もやもやする嫌な夜になった。

その１６　廃墟の古小屋（後書き）

つづく。

その17　町へ

朝方、気がつくとリビングは温かい香りでいっぱいになっていた。ぼさぼさになった灰色の髪の毛。肌寒さから、ソファに掛けた上着を羽織った。テーブルには毛むくじゃらの黒い塊がぶよぶよと息をしている。そして、スズが入れたのだろうか、湯気を立てるコーヒーが置かれていた。

「いい匂い」

ポセットは一口それを飲んだ。苦い。

寝室の扉が開き、スズが出てきた。神妙な面持ちで、静かに、扉を閉める。

「おはよう、スズ」

「あら、早いのね。――ようやく、日が出てきたわ」

どうやら、眠れなかったようだ。スズの目は赤く腫れているようだった。

「とてもいい天気よ。――今日は、長い日になりそうね」

スズはそう言って、椅子に腰かけた。軋む椅子の音が、どこか悲しく聞こえた。

「テルルは、まだ起きないわ。薬を嗅がせたからね」

「――なんでも持ってるんだね」

「なんでも持っているのは、？あいつ？の方よ。前に頼んで持ってこさせたのよ。ろくなことに使いやしないわ」

？あいつ？という言葉に、ポセットが反応した。

「その……、？あいつ？っていうのは誰なんだい？　テルルくんも何度か言っていたけど……」

スズは何か言いかけたがやめて、ポセットの手元からコーヒーをひったくった。

「教えてあげるわよ、後でね」

ズズッとコーヒーを飲む。

「今は、朝の一時を楽しみましょ。何か、お話ししてくれる？　そうね、楽しい話が良いわ。あなたの苦労話でいいから」

「苦労話って……。じゃあ……」

旅の話をした。毒キノコを食べてしまった時の話だ。

ナットが空腹のあまり奇妙なキノコを食べて、それが毒キノコだと分かった時にはすでに、ナットはピヨピヨとひよこの真似をし始めた。

「ナットは自分が鳥の子だと思い込んでいて、しきりに空を飛ぼう

とするんだよ」

それを、ポセットも食べてしまったのだった。しかし幸運ながら、その毒を消す薬となる花があることを知っていた。その後、自分がミミズの子だったような不思議な気分と、土を頬張って地面に埋まりたい衝動と闘いながら、その花を探しまわったのだった。

「あっはは、それで？　花は見つかったの？」

「見ての通り、完全にミミズになるまえに花を摘めたよ。気がしっかりしてきたら、口の中が土だらけになってて大変だった」

本当に苦労話だったが、彼女は笑ってくれた。風に揺れる植物の迷路の声が、優しい歌を歌っているように聞こえる。

温かい時間が過ぎ、外は朝の清らかな冷気でしんと静まっていた。ポセットは寝ぼけるナットを肩に乗せ、スズはテルルの額にキスをして、二人と一匹で町へと出かけた。

町への道は、相変わらず複雑に入り組む迷路を通る。この迷路を作り出す植物たちは一体なんなのだろうか。秋風にうねるその姿は、入ったものを逃がさない、生きる迷宮のようだった。

迷路を抜け、町へと出る。スズはさっきから一言も話さない。

「オイラ、なんだか怖いよ」

「大丈夫。スズを信じて、着いて行こう」

スズは真っ直ぐに広場へと歩いて行った。到着するとピタリと立ち止まり、颯爽と振り返った。

「あなた、私が今何歳か分かる？」

「え？」

見た目はポセットとあまり変わらなく見えるが……。しかし、絵に描かれていた五十年の月日を、ポセットは知っていた。

「その顔、どうやら、絵は見たようね。そして、大体感づいたってところかしら？　そう。私は、本来この姿でいられるはずのない年月を生きてきたわ」

自らの胸に手をあて、苦しそうに服を握りしめた。

「心臓が止まってから、どのくらいたつのかしらね。体は腐りもせず、衰えもせず。――きっと、心臓と一緒に、私たちの時間も止まってしまったんだわ。痛みもなく、ゆっくりとゆっくりと、私の身体は、私のものではなくなっていく。時間を感じさせてくれるのは、思い出が詰まっていたはずの故郷が、朽ちていく姿だけよ」

スズはくるりと回転し、町を一瞥（いちべつ）した。その瞳には、もはや涙すら浮かばない。

「この像、知ってる？」

そう言って、スズは人の形をした銅像を指さした。それはここへ初めて来た日、ポセットたちが見つけた銅像だった。そう、かつて

の町長、レパードさんを讃える像。

「知ってるよ。確か、レパード＝リメルヒさんの像だよね」

「そう、レパード＝リメルヒ。彼が、私の……そしてテルルの、父親よ」

「レ、レパードさんが……？」

「そう、私の本名は？スズ＝リメルヒ？。お父様は、偉大な政治家だったわ。家族を愛して、町を愛して、そして……、死んだわ」

スズはすたすたと歩き始めた。昇りきらない太陽が崩れた建物から僅かに光を漏らし、夜露に濡れた像を照らした。

「……」

ポセットには、レパードさんが泣いているように見えた。

その17　町へ（後書き）

つづく。

その１８　巣食う悪魔

スズは建物の中へと入って行った。埃っぽいドアが音を立てて開き、部屋の中には壁いっぱいに掲げられたあの絵が静かにこちらを見下ろしていた。

並ぶ家族。五十年前の姉弟の姿。

「ここはこの町の役所だったの。そしてこの部屋はお父様の部屋。町長の部屋ってわけね」

部屋のわきには、乱暴にぶち開けられたドア。

「あなた、随分手荒なまねしてくれたのね」

「ご、ごめん」

「まぁ、いいわ。この絵も、本当は二度と見たくないっていつも思うもの。でも、つい見に来てしまうわ。お母様の姿は、もう、この絵でしか見ることが出来ないの」

かすんだ絵の中。スズの隣には微笑む女性。落ち着いた色のドレスと、その胸に煌めくネックレスが印象的だった。木の葉を模ったその緑の宝飾は、古びた絵の中でも特に輝いて見える気がした。そして、その女性はなんとも優しそうな顔をしているのだった。

「あれが、君のお母さんか。――お母さんも、亡くなったんだね」

「ええ。お母様は、最後まで人らしくあろうと……。そして、私たちを誰よりも愛し、悲しんでおられたわ……」

「君たちの秘密と、関係があるんだね」

「ええ。私たちの秘密を話すには、まず、私たち家族のことを知ってもらわなきゃいけないわね。まず、左からテルル、私。そしてお母様。椅子に腰かけているのがお婆様、その隣がお父様よ」

そう言うと、スズは回れ右をして、真っ直ぐ扉から出て行った。ポセットも慌てて追いかける。

「どうしたんだよ」

「だから、あの絵はお母様の顔を見るためにしぶしぶ見に行ってるの。あと、今日はあなたに説明したかったからよ。本当なら、あんな絵、すぐ燃やしてやるわ」

「どうしてそこまで……」

スズは足を止め、ポセットを睨んだ。

「この町をこんなにしたのは、紛れも無く私たち家族だからよ！」

スズは息を荒げ、すごい剣幕で言いきると、バタバタと走っていった。追いかけると、崩れた家の壁に座り込んでいた。ポセットたちが初日に座ったところだった。

「落ち着いて。どういうことか、話してくれるかい？」

「話すわよ……。でも、あなたがそれを知って、どうなるの？　そうよ、あなた、テルルを早まらせずにつれ帰ってくれたから、お礼代わりに話そうかって思ったけど、あなたそれをきいてどうするの？」

「僕にも、ちょっとした秘密があるんだ」

「秘密？」

「僕には、記憶がないんだ。ずっと昔、いつの頃からか、記憶がすっぽり消えてしまっているんだ。その手がかりを探している。君たちと、この廃墟の町の秘密が、その助けになってくれるかもしれない」

スズは、少し驚いた顔をした。そして小さく、そう、と言うと、ゆっくりと口を開いた。

「私もテルルも、もとからこんな体だったわけじゃないわ。体温も心音も無い、この死んだ体。こうなってしまったのは、平和だったこの町を襲った、ある災いのせいなの」

「災い？」

「疫病よ。五十年ほど前。お父様が町長になって、まもなくのことだったわ」

どこから来たのか、症状にも前例が見られず、感染方法もわからず、なにより、治療法が不明だった。

「それは、？緑化病？と呼ばれたわ。高熱、吐き気、頭痛などの症

状がでて、最後には死にいたる。名前の由来は、死んだ病人の身体から、草の芽が息吹くから」

「草の、芽……？」

「そう。そして、その病気が実は病気ではなく、？寄生植物？によるものだと分かる頃までには、町の全ての住人が、その植物に汚染されていたのよ」

「寄生する……植物だって？」

「ええ。彼らは胞子のように小さく軽い、言わば種の働きをする部分を、風に乗せて飛ばすの。生き物の肺から入って、じっくりじっくり、痛みも無く、その人を蝕んでいくわ」

「そして、最後には、殺してしまう……？」

「ええ。体中に植物の根が行きわたり、動物としての活動はもうできないわ。栄養を吸われ、気がつけば、人と植物が入れ替わっているのよ」

「そんな……」

「町の医者も随分と頭をひねって、いくつも薬を作ったわ。でも、結局どれも、感染者を救うことはできなかった。町から人がいなくなり、その植物が代わりに町を覆っていったわ」

「それで、この廃墟か……」

ナットがポセットの肩で震える。

「そ、そんな危ない植物があるの……？　って、え！？　てことは、オイラたち、もう感染しちゃってるんじゃないの！？　どうしよう、ポセットぉ！」

「安心して、もうあの植物は活動していないわ」

「え……、どうして？」

「私のお母様とお婆様が、食い止める薬を作ったからよ。二人は、偉大な研究者だったわ」

スズはそう言って、ポケットから透明な小瓶を取り出した。中にはなにやらゆらゆらと色を変える怪しい液体が入っていた。

「これがそう。このひと瓶で、なんとか人一人を救えるわ。植物の生命力は、それほど強いものだったの」

「じゃあ、君もそれを飲んだのかい？」

「ええ。でもこれは、人を救うとは言っても、一般的な救うイメージとは全く異なる救い方なのよね。まぁ、私を見たらわかるでしょう？」

「どういうことなのか……」

「あら、思いのほか想像力乏しいわね。この薬は、植物の運動をストップさせるものなのよ。取り除くことはできなかった。殺そうと思えば何か手段はあったでしょうけど、植物よりも先に、感染者が死んじゃうわ」

「つまり、体内の植物を眠らせてしまって、感染したまま一生を送ろう……と」

「まぁ、そうね。でも、そんな簡単な話じゃないわ。今の私は、この植物が体に張り巡らせた根を利用して、栄養や酸素を取り入れているんだもの。もはや、この植物と私はギリギリのラインで共生しているのよ」

見ためでは、普通の人と何ら変わりないカタチをしているというのに。この小さな体には、どれほどの悲しみと苦痛が詰まっているのだろうか。

「体内に植物を宿したまま半生を送る。そのことを潔しとした人はいなかったわ。諦めるな、まだなにか手立てがあるはずだ。そう言って、みんなが研究者たちを責めたわ。特にお母様とお婆様は、この薬を作り上げた張本人。植物に感染して、頭までおかしくなったんだと、迫害まで受けたわ。お父様も町を守り切れず、反対派の人たちに殺されてしまった……」

スズは悲しそうに空を仰いだ。秋晴れの良い天気。少しだけ、冬の匂いがした。

「身の危険を感じたお母様は、お婆様と私たち姉弟をつれて、町から逃げ出したわ。でも、遅かった。お母様がまず発病して、日に日に体が弱っていった。次にテルル。お婆様も私も時間の問題だったわ。そこで、この薬を使うことにしたのよ。もちろん動物実験もしていない試験品。うまくいかなければすぐさまあの世行きよ」

「でも、うまくいったんだね」

「どうかしらね」

スズはそっけなく言った。立ち上がり、歩きだす。

「帰りましょ。テルルが起きるころだわ」

「ちょ、ちょっとまってよ、まだ聞きたいことがあるんだ」

「なによ」

「？あいつ？って、誰のことなんだい？」

「――私たちを使って、実験を進めているヤツよ」

スズはのしのしと進んでいく。ポセットは急いで追いつき、並んで歩く。

「お母様が死んで、お婆様は薬を打ったけど、遅かったわ。そして瀕死の私たち姉弟がこの町に戻ってきたとき、町はすでに植物たちの領域になっていた。それでも人であろうとした人たちは、集まって無理心中……。大きな炎でそろって灰になったわ」

「それで、君たちだけが……」

「ええ。でも、テルルは薬を打つのがおそかったから、植物の進行が若干進んでいるの。あの子は、瀕死のまま生きているのよ。初めのうちは痛がって動くことも、息をするのもやっとだったのに、今では走りまわっているわ。植物が耐性をつけて、テルルの身体をのっとり始めているのよ。痛みがないのはそのせい」

「そんな……」

「そこに目をつけたのが、？あいつ？だったのよ。この植物を研究し、薬を研究し、何が目的か知らないけど、私たちをまるでモルモットみたいに扱うわ。薬や生活物資もあいつから手に入れているの。代わりに私たちは、あいつから渡される薬を自らの身体に投与する。植物を殺さずに、生かしておく薬よ。あいつの実験のためにね」

「そんな……、人体実験じゃないか！」

「そうよ。でも、あいつは前に言ったわ。お前たちはすでに人じゃない。だから、これは人体実験じゃない。酸に亜鉛をつけて水素を出すのと同じ。ささやかな、ほんのささやかな実験なんだってね」

「なんだって……」

ポセットは怒りに震えた。？人ではない？。こんな体だから、その言葉を投げかけられる痛みをよく知っている。そして今も悩んでいる。とても人ごととは思えなかった。

「僕に、何か出来ることはないかい？　その、？あいつ？を僕がやっつけてあげようか？　いや、むしろそうさせてくれ。一発や二発殴った程度じゃ、気が済まない」

ポセットは熱した鉄のように熱く怒っていた。それをスズの冷えた掌が冷ます。

「落ち着いて。あいつを殺したりなんかしたら、私もテルルも死んでしまうわ。いつか、あいつが植物を取り除くような薬を作るまで

の辛抱なのよ。それをずっと待っているの。この死んだ町で、弟とたった二人、止まってしまった命を握りしめてね」

その１８　巣食う悪魔（後書き）

つづく。

その19　さよなら

帰り道。ポセットはスズの後ろを追って歩いた。寄生植物の侵食、実験の薬物投与、ぎりぎりで掴んだ命は削れていく一方だ。

もはやこの町に、命と呼べるものはないのかもしれない。あるのは、生きたいという想いだけ。ただ、それだけなのだろう。

家に着いたが、テルルはまだ眠っていた。このまま目を覚まさないのではないかと思うほど、テルルの寝顔は安らかで、彼がしがみついている命は頼りないものだった。

コーヒーを入れた。二人で飲む。ナットはテルルの見張りに出した。ベッドの上で、テルルの顔を心配そうに覗いている。

「あの子の命は、もう長くないわ。そして、あの子が最後に一度でいいから、海を見てみたいと思っているのも知っているわ。あの子、町を通る川で、泳ぐ練習だってしてたもの。でも、最後の最後まで諦めたくない。諦めさせたくないの」

「――難しいけど、それも、正しいことなのかもしれないね」

苦い味が広がる。

「あなたには、なんだか何でも話せて、気が楽になったわ。ありがとう。でも、あなたがここにいると、テルルはあなたを頼ってしまうわ。私もだけど。だから、お願い。出て行って」

ポセットはしばらく風の音に聞き入った。そして、自分の無力さを思い知った。

「わかった」

正しいことなどわからない。

テルルがまだ寝ているうちに、家をあとにすることにした。スズが町の出口まで見送ってくれるらしい。

「迷路を抜けるまでいいのに」

「いいのよ。あなたはなんだか、話していてとても楽しいの。きっと、一生忘れないわ。どこまである一生か、わからないけどね」

ナットが悲しそうに鳴く。ポセットも、きっと忘れないだろう。

外へ出ようとしたその時、ポセットは思い出した。あの真っ赤なドレス。

「あの、スズ、ドレスなんだけど……」

「え？　ああ、そうだったわね」

スズは寝室からドレスを持ってきた。少し気に入っていたのだろうか、ポセットに渡す前に、一度広げてまじまじと見た。

ポセットは渡された真っ赤なドレスを綺麗にたたみ、鞄へしまった。

町の入り口へは、すぐに着いた。今朝見た入り口が、何年も経ってしまったように感じる。

「じゃあ、ここで」

スズが門の傍で立ち止まる。ポセットは振り返り、手を振る。

「ありがとう」

「それは、こっちのセリフよ。ありがとう」

ポセットはせめて笑顔で別れることにした。しかし、何とも言えない悲しさはぬぐえない。

「さようなら、スズ。君たちの幸福を、心から願うよ」

「にゃあ。元気でね」

「ありがとう。あなたたちも、気をつけてね。あなたの記憶が戻ることと、その先に幸せがあることを、神に祈るわ」

「ありがとう……。さようなら、スズ」

「ええ、さようなら」

またねとは、どうしても言えなかった。コーヒーとは違う苦さを味わいながら、ポセットは町をあとにした。

黄金に輝くススキの原。風のない今は、とても静か。

「どうするの、ポセット？　どこへ行くの？」

「とりあえず、このドレスを返しに行こう。きっと、あのおばあさんのお孫さんは、寄生植物にやられて、亡くなったに違いない」

「怖いね。体に草が生えるなんて……」

「世界には、想像を超える恐ろしいことがあるものだね」

先日の巻き戻し。また、山へと登らなくてはならない。相変わらず人の通った跡がない、忘れられた道を行く。

ふと、風がやわらかく横切って行った。潮の香り。きっとこの潮で町の建物の鉄骨は錆に覆われているのだろう。

山をおりた日。途中で見た紺碧の海を思い出す。テルルが見たがっていた、母なる海。

「あ、そうだ。一度、海へ行ってみないか？」

「えーっ！　やだよ！　あんな、水しかないところなんて！」

「いいから、行ってみよう」

ポセットは大きく道を曲がった。ナットが肩でバタバタと暴れる。

「いやだ！　いやだいやだいやだぁ！　溺れたらどうするのさ！」

ポセットは足を止めない。秋晴れの空を眺め、広い海を思い描きながら、あの姉弟を想う。

ススキがうねる。潮の香りは一歩踏み出すごとに強くなっていった。

その１９　さよなら（後書き）

つづく。

その２０　侵入者

昼下がり。海は静かで、穏やかな波の音が、おとぎ話を紡いでいるように聞こえる。

海岸で海鳥が羽を休める傍らに、ポセットとナットの姿があった。ナットは海鳥の卵を狙っている。

「やめろよ、ナット。いつも卵なんて欲しがらないくせに、どうしていきなり……」

「どうしてって……、なんでだろう？　なんだか、体の底から沸き上がる何かが……」

「前に、オイラはそこらの野蛮な猫とは違う……って言ってなかった？」

「それはそれ、これはこれ」

そう言って、ナットは鳥の群れに突っ込んでいった。計画も作戦もあったものではない。野蛮というか、乱暴というか……、お粗末。

「うにゃおおぉぉぉ！」

海鳥が一斉に飛び立ち、慌てた様子でポセットの隣をすり抜けて行った。空から舞い落ちる羽根。ポセットはやや神経質にそれを払った。

そのとき、ふわりと風が吹いた。羽根が落ち葉のようにひらひらと横へと流れ、視界から消える。それを追うように振り返ると、砂浜のずっと先に、何か立っているのが見えた。かかしのようにも見える。ポセットは砂を踏みしめ、風を受けながら近づいて行った。

それはボロボロの十字架だった。名前はわからない。しかし、十字架には、汚れた小さな鎖がかけられているようだった。

「これは……」

それを手にとり、砂を落とす。

ポセットは声が出なかった。息をのむ。それは鎖などではなかったのだ。ポセットはそれをそっとポケットにしまった。

これで、誰の墓なのかはわかった。しかし、誰がこの墓を作ったのだろう。通りすがりの人でもいたのだろうか？

ナットのもとへと戻ると、幾羽の海鳥がぎゃあぎゃあ鳴きながら、ナットをとり囲んでいた。

「な、なにやってるんだ！」

「あ、ポセットぉ！　どこいってたんだよぉ！　たすけてよぉ！」

海鳥の輪の中に乱暴に押し入り、黒猫をさらって走り出す。海鳥ががつがつ頭をつついて来る。帽子をとられないように押さえながら、なんとか逃げ切った。

「――で、卵はとれたのかい？」

「ん～ん」

首を振るナット。さして欲しくもなかったのだろう。とっくに興味はないようだった。

「で、今度こそ山へ行くの？」

「いや、もう一度スズたちに会いに行こう。渡すものが出来たよ」

一応、収穫はあった。これがあれば、きっとスズもテルルも生きる希望を見出すに違いない。

何も知らないまま、ポセットは今来た道を引き返して行った。

廃墟へと続くさびれた道。しかし、スズの喜ぶ顔を、そしてテルルの笑う顔を思い浮かべると、何もない道でも不思議と心躍るものがあった。

「一体何を拾ったの？」

「秘密。あとで見せてあげるよ」

山へ向かう道に出た。逆の方向へくるりと曲がり、浮かびそうな気分で歩いて行く。やがて町が見えてきた。

「見えてきた」

「さっき出てきたから、全然懐かしくないね」

ナットはポセットがこのまま廃墟に居座ってしまうのかもと、ちょっと不安だった。ポセットには旅人に必要不可欠な？自己愛の精神？が足りないと、ナットは常々そう思っている。情に流され、旅先で出会う不幸な人に、すぐ肩入れをする。だから厄介事に巻き込まれる。

しかし、それがポセットらしさなのだと、ナットはどこか納得してもいた。

「ポセット、早く渡してこよう。そしたら、今度はおばあさんの家にいかないと」

「そうだね。もしかしたら、おばあさんがまたココアを入れてくれるかもよ」

「ホント！？　早く、早くポセット！」

やや急ぎ足で道を行く。そして、今にも崩れそうな町の影が見えてきた頃だった。

空に、低く長い音が響いた。鉄の扉を叩くように聞こえるそれは、確かに銃声だった。

「なんだ！？」

「町から聞こえたよ！」

「舌噛むなよ、ナット！」

荒れた道を走る。砂が舞い、町が近づく。その間にもまた、銃声が響いた。

門をくぐり、荒れた息を整えもせず、まっすぐ迷路へと突っ走る。レパードさんの横をすり抜け、建物の角を右へ左へと駆けまわる。植物の迷路が見えたと同時に、もう一発銃声が鳴った。近い。

ナットの耳がレーダーのように音を捉えた。髭で風を読む。

「ポセット、三時の方向！　迷路の中だ！」

聞くやいなや、弾丸のように植物の壁を貫く。この町に生き物はいない。狙うとすれば……。考えうる標的は二つしかなかった。

「でてきやがれ！　ぶち殺してやる！」

叫びをあげるのは髭を蓄えた男だった。手には水平二連式の散弾銃を構えている。

「なんだあいつは……？」

「酔っぱらってるのかもよ」

「そこか！」

ガサガサッ。壁が揺れる。

男が引き金を絞る。ズドンと弾丸が飛び出し、壁がちぎれる。しかし、植物の壁は厚く、向こう側を垣間見ることすらできない。

ガサガサッ。

「こっちか！」

ズドン！　何度やっても同じ。やがて重い銃声が一つ鳴り、男が痛みに倒れた。

「あきれたヤツね」

壁から現れたスズは、銃を男に突き付けた。

「ま、待て！　頼まれただけなんだ。俺は別に……」

スズは顔色一つ変えずに男を見下ろしていた。その細く白い指が、引き金にかかる。

「ダメだっ！」

ポセットが飛び出す。声に驚いたスズの一瞬の油断。男は腰からリボルバータイプの銃を取り出し、出鱈目に引き金を引いた。

スズの身体を鉛の弾丸が穿つ。ポセットが男の銃を蹴り飛ばし、スタンガンで気絶させるまでに、スズは腹部に一発受けてしまった。

崩れるスズを支える。

「スズ！」

「あなた……、なんで……？」

ポセットはスズと男をいっぺんに背負って、迷路の奥へと進み始めた。さすがに二人は重い。

「とにかく……、小屋へ行こう。しっかりするんだ、急所は外れてるよ」

「私なら大丈夫よ……。道案内……するわ」

スズに道を教えてもらいながら進む。小屋へは思ったより早く着いた。何度も往復したせいで、ポセットの身体も知らず知らず道を覚えているようだった。

その２０　侵入者（後書き）

つづく。

その21　ばけもの

小屋に入ると、テルルが包丁を持って、そろっと出てきた。

「あ、あれ、ポセットくん！？　故郷からお母さんが迎えにきたんじゃなかったの！？」

「スズ、どんな言い訳したんだ……」

「テルルは小さいうちにお母様と死別したから、そう言った方が諦めがつくと思ったの。ねぇ、早くおろして……」

ポセットはスズを寝室へ運んだ。男はまだ気を失っているが、目を覚まされたら面倒なので、手足を縛ってソファに寝かせた。

「誰なんだ、この人」

「なにも知らない、ただの通りがかりの人だよ。？あいつ？はたまに、こうやって侵入者をけしかけてくるんだ。どういうつもりなのかわからないけど、多分、実験の一環なんだと思うよ。それより、お姉ちゃんを……！」

男はテルルとナットが見張ることになった。

スズは右わき腹を抑えている。手をどかし、服をめくろうとして、一昨日の晩を思い出す。

「言っとくけど、これは手当だ。勘違いしないで」

「しないわよ。いいから包帯取って。あなたの手当なんていらないわ」

ポセットがスズに包帯を渡すと、自分でぐるぐると巻き始めた。痛々しい傷口からはたった一滴の血さえ流れていなかった。心臓は働いていない。血も、流れていない。その証明。

「痛みは、感じるのかい？」

「まぁ、感じるわよ。でも、きっと普通の体だった頃よりは鈍くなってると思うわ。ちょっとやそっとじゃ死なないのよ。植物の生命力がそのまま私の生きる力になっているみたいにね」

「その、？あいつ？って人は、君たちの生命力を試すために、ああやって侵入者を？」

「そうなんじゃないの？　あなたも最初はその一人かと思ったわ」

「なるほど、それであの出迎えだったわけだね」

「まあね。それで？　なんで帰ってきたの？　テルルを折角諦めさせたのに」

「え、あ、ああ。実は、これを……」

手がポケットへと伸びる。

バギンッ！

「ん？」

リビングから、何か壊れるような音がした。

「なんだろう？」

バタバタ、バタバタ、ドカン！

忙しく足音が鳴って、テルルが扉を突き抜けるような勢いで現れた。何かに追われるように扉を閉め、抑える。

「どうしよう！」

「「なにが？」」

二人の頭上にはクエスチョンマークが浮かぶ。というか、ナットがいない。

「ナットは？」

「窓から出てったよ」

「え、ナットが何かしたのかい？」

「違う、違う！　とにかく、早く逃げよう！　ここにいたら危な……」

言い終わる前に、テルルがドアごと飛び込んできた。砕けた蝶番と、くの字に折れたドアをどかすと、寝室の入り口の前に、何かが立っていた。

「こ、これは……」

実験とは、このことだったのか。スズがそれを悟るまでの時間は、その何かがポセットを小屋の外まで投げ飛ばすには十分だった。

視界が回り、体に衝撃が走る。気がつけば小屋の薄い壁に大穴があき、ポセットは外に倒れていた。大穴からは割れたテーブルと倒れた椅子が見える。

「ポセット！」

ナットが駆けてきた。ポセットの肩にのる。

「どうなってるの！？　いきなりムクムクって膨れて……、ボカーンって！」

「説明は後だ。とにかく、スズたちが危ない！」

思ったよりダメージは大きい。やっとのことで立ち上がり、トンファーを握ると、小屋の中から銃声が聞こえてきた。二発、三発。四発目の音は無く、代わりにスズのものと思しき悲鳴が聞こえた。

「スズっ！」

寝室へ駆けこむ。そこに二人の姿は無く、窓がめちゃくちゃに割られ、やはり大きな穴になっていた。

「どこへ行った？」

窓から外へ飛び出す。どこからか、声が聞こえる。

「スズの声だ！」

「ポセット、あっち！」

ナットの指す方向へ向かう。しかし、追跡はいとも簡単に行えた。銃弾さえ通さない植物の壁が、巨大な隕石でも通って行ったかのように左右に分かれ、道を作っていたからだ。

「一体、何ものだ……」

「化けものだと思うよ」

道を進む。まるで大蛇の通った道のように、草はきれいになぎ倒されている。そして等間隔に、岩で押しつけたような強力な足跡が残っていた。

迷路を抜け、町へと出る。足跡は乾いて硬くなった地面にもくっきりと残っていた。

「あれか……」

物陰から、発見した？何か？を見る。わめくスズと、気を失ったテルルを抱えている。

その姿、何とも言い難い。一応、人の形をしてはいるが、体は全身ぶくぶくと膨れ、腕はまるで今そこらへんから引っこ抜いてきた大木をくっつけたようにぐしゃぐしゃ。手であるはずの部分は木の根に見える。肩から真っ直ぐに幾本もの突起が天に伸び、首は見受けられず、顔もあるかどうか疑わしい。足も腕と同じく、木の根の

ように入り組んでいる。そしてその肌は黒や緑、緑青色を基調としていて、もはや肉ではなく、うろこか木の皮のようだった。時折、ぐおぉぉっと低く鳴いているように聞こえる。

「ポセット……。あれ、さっきよりも、大きくなってるよぉ」

「まるで、枯れた大木の化け物だな」

その２１　ばけもの（後書き）

つづく。

その22　しぶしぶの奥の手

ゆっくりと歩を進める巨大な黒い影。見つからないようにひそひそと後をつける。

「さっきのおじさんが目を覚まして、いきなり風船みたいに膨れて、ああなっちゃったんだ！　お化けだよ、お化け！」

「とにかく、スズたちを助けよう」

「あれ、殺すの？」

「そもそも、生きているのか……。行くぞ。ナットも協力してくれ」

作戦はこうだ。まず、ナットが目標の足元をちょろちょろと動き回る。動きが遅いので、ナットなら捕まりも踏まれもしないだろう。目標が足元のナットに釘付けになっている間に、後ろからポセットが不意打ち。見事二人を取り戻し、後は走って逃げるだけ。とにかく、相手の動きは遅いのだ。

「にゃん。じゃあ、オイラのフットワークがうなるね。まさに猫のお仕事。キャットワークだね」

「いいから早く。二人が食べられちゃうだろ」

ナットが飛び出す。目標の目の前に立ちはだかり、ささっと華麗に身を返す。舞いを踊るかのようなステップ。

しかし、相手はナットに見向きもせず、のしのしと太い足を繰り出し、どこへ向かう気なのか、まっしぐらに進んでいく。

「にゃ！　オイラのステップを無視するとは……！」

どうしてもお金が無い時、町の大通りなどで今のようにナットが身軽さを披露すると、町の人々は盛大な拍手と、少々のお金をくれる。その時ばかりはポセットもナットに頭が上がらない。そんな経験があったので、目標にまるで相手にされなかったことが気に食わなかった。

ナットは引き続き目標にちょっかいを出す。近くで見ると、やはりそれはもはや人ではなく、巨大な、動く木の化け物だった。

「オイラを無視するなぁ！」

「あ、こら、猫！　助けなさい！　じゃれてるんじゃないの！」

スズがナットに気付いた。ポセットはどこか、なにをやっているのかと怒鳴る。

「助けてるのに、うるさいなぁ。ちょっと静かにしてて！」

「生意気な猫ね！　いいから早くしなさい！」

でも、木の化け物はナットなんて目に入っていないような素振りなのだ。そもそも、目があるのだろうか？

「どうしよう、ポセットー！」

埒のあかない雰囲気をみて、ポセットが走りだす。

「ばか、呼んだら不意打ちにならないだろ……」

トンファーに仕込んだスタンガンの出力を上げる。大きくとびかかり、スタンガンをくらわせた。乾いた音が響き、紫の火が散る。

しかし、スタンガンを受けても、木の化け物はいとも簡単にポセットを払いのけ、のしのしと足を止めない。

「一体、どこへ向かってるんだ……？」

「ポセット、どうしよう」

それからぼこぼこと見苦しいまでに抵抗を続けたが、成果は上がらず、スズの苛立ちが膨れるばかり。もはや腹の痛みなど忘れて、怒鳴り散らしている。

「早くしなさいよ！」

ポセットもナットも、ほとんど手を尽くし切ってしまった。躓かせようと足を取っても、力が強くて失敗。石を投げても、スタンガンをあてても、ナットがひっかいても無視。他に武器も無く、そもそも歩幅が大きいので、ちょっと休むとずっと遠くへ行ってしまう。追い続けるのも疲れる。

「どうしよう、どうすれば……」

「ポセット、もう、あれしか……」

ナットの言わんとしていることは分かる。しかし……。

「でも……、戦いに使うのはあまり……」

「早くしないと二人が食べられちゃうよ！」

ナットが叫ぶ。少しの間考えて、ポセットの目つきがキッと、鋭くなる。

「ポセット、やる気になったの？」

「少し持ってて」

そう言って、帽子と上着を脱ぎ、鞄とスカーフを落とす。トンファーも捨てた。

「持てないよ。猫だもん」

「じゃあ、見てて」

「誰も盗らないよ」

「うるさいな。ちょっと黙っててくれ」

体を駆け巡る振動に、呼吸を合わせる。体を鼓動が包んでいく。

舞い上がった砂が、空中で静止する。空気を伝わる音の波が、肌で感じられる。世界が止まり、体の中で何かが噛み合った。

？アクセル？。それはポセットの体に備わった機能。

ポセットは止まった世界の中を動く。慣性の力からは逃れられないので、下手な動きはできないが、直線的な動きなら、無敵である。

化け物の前へと立ちふさがり、地を蹴る。弾丸のように飛び出したポセットの体。勢いに乗せて、化け物の腕を砕いた。古木のようなその体が肩から崩れ、姉弟を解放した。

と同時に、アクセルが解ける。急激な体の痛みと、疲労感が襲う中、ポセットは姉弟二人を抱え、着地した。

「すっごい！　やったぁ！　さっすがポセット、くぁっくいぃ～」

ナットが飛び跳ねる。ポセットは疲労困憊、その場で倒れ伏した。

「あ、あなた……、その……。もっと、優しく助けられないの？　気持ち悪くなったわ」

スズは空中でぐるぐる回ったので、すっかり酔ったらしい。テルルはまだ目を回していた。

「……」

ポセットは何か言ったが、聞き取れない。

「え？　なに？」

ナットが駆けよる。ポセットの荷物はすっかり置いてきていた。

「ありがとうくらい言って欲しいね、だって」

「よくわかるわね。――なんで口回ってないのよ？」

「満身創痍なんだよ。ともかく、助かってよかったね！　ポセットも格好よかった！　神話に出てくる英雄みたいだったよ」

「はは、それは……、よかった……」

ともあれこれでひと段落。二人とも無事助けられたことだし……。

ぐおおぉぉぉっ！

低い唸り声が地を這って轟いた。そうだ、忘れていた。こいつをどうにかせねば。

その22　しぶしぶの奥の手（後書き）

つづく。

その２３　襲撃

「逃げるわよ、何やってるの！　早くテルル担いで！　早く！」

「ポセット、オイラ先行ってるね」

スズとナットがさっさと逃げていく。ポセットがどれだけ疲労しているか、少なくともナットは知っているはずなのに、薄情者。

などと考えている余裕も無い。後ろからはズシズシと化け物が迫っていた。ポセットは帽子からなにから全て上着で包んでひとまとめにすると、テルルを背負って走り出した。

いや、走り出そうとした。

「ま、待って！　本当に無理だ！　とても運べない！」

ポセットはその場で倒れた。もう動けない。

上半身を起こし、化け物と向かい合う。大きな木の化け物。失った腕のダメージなど、全く意に介さず襲ってくる。

迫る化け物。しかし、ポセットの後方から援護射撃が始まった。スズの銃が火を吹く。

「この化け物！　弟に近づくんじゃないわよ！」

化け物の体が僅かに砕け、破片が散る。化け物が後退する間に、

ポセットはなんとか立ち上がり、テルルを運んだ。

「ポセット、大丈夫？」

「大丈夫じゃない……」

化け物の右腕はポセットの攻撃で木っ端みじんに崩れてしまっていたが、残った左腕をぐわんぐわんと振り回す。一振りするたびに、廃屋が音を立ててつぶれる。

「ちょっと、町壊すんじゃないわよ！」

「なんて力だ……、本当に化け物じゃないか……」

人からこんなものになるとは。およそ信じがたい光景であった。しかし確実に、化け物は巨大な腕を振り回し、三人と一匹を追い詰めていく。

スズの銃の弾が切れた。スズはへろへろのポセットから弟をひったくり、走って逃げ始めた。ナットもそれに続く。ポセットはよたよたとなんとか逃げていく。

角を曲がり、建物の陰にしゃがみ、隠れた。化け物は大きな体のせいで足元が見えていない。そのまま気付くことなく、向こうへと歩いて行ってしまった。

足跡が聞こえなくなるほど遠くへ行ってしまったようだ。スズは立ち上がり、辺りを見回して、ホッとしたように顔をほころばせた。

「行っちゃったわね」

「あれはなんなんだい？　さっきの男がああなったってナットが言ってたけど」

「本当だよ！　さっきのおじさんがいきなり苦しみだしてさ、風船みたいにブクブクって……！」

「そうね、全く考えなかったことだし、今でもまだ信じられないけど……。あれは、？あいつ？の実験成果ってこと……かしら」

「あんな化け物を作り出す研究をしていたって言うのかい？」

「ええ。これを見てよ」

スズは包帯を巻いたわき腹を見せた。包帯をとり、傷口を見せる。しかし、そこに傷はなかった。すっきり、元通り。

「そんな……、さっきは確かに……。こんなに早く……？」

「これは、植物の力よ。言ってたでしょ？　共生してるんだって」

「言ってたけど……」

「薬で成長が抑制されているから、私が死んでも植物は私の体から芽吹けないの。だから、生きるためには私を生かさなくてはならないのよ。ありがたいことだわ」

スズは皮肉るように言った。

「何十年もその力を研究し、消滅させるための手立てを探っている

んだと思っていたのに……。まさかそれを利用して、あんなおぞましいものを作り出すなんてね……」

テルルは気を失っている。死んでいるようにも見えるが、確かに、生きているようだった。

「よく寝るね、テルルくん」

「体力がもう、着いていけないのよ。本当に、限界なんだわ……」

スズはポセットの隣に座り込んだ。テルルの頬を愛おしそうに撫でる。やがて、大粒の涙をこぼし始めた。

「最後の……。最後の希望だったのに……。いつか、この体から……、悪魔が消えて……、テルルと一緒に、海に行ける日が……。ずっと、ずっと……待っていたのに……」

待ち望んでいた結果は、スズの理想とはあまりにもかけ離れていた。いや、むしろ正反対のものだった。人の体を媒介に、より力を増した植物。人は器。意思を持ち、操るのは、寄生植物の方。

「ふざけんじゃないわよっ！」

スズが叫ぶ。テルルを抱きしめ、震える手で涙を拭う。テルルと一つになろうとするかのように、何度も何度も、テルルに頬を寄せて泣いた。

スズが泣きやんで、しばらく時間が経った。ナットが髭を垂らし

てポセットを見上げる。ポセットの体の痛みはすでに薄れていた。

恐る恐る、声をかける。

「スズ……」

ズドン。ポセットが言い終わるが早いか、地面が大きく揺れた。ナットがポセットの肩へと登り、スズとポセットが空を見上げる。

しかし、どこにもあの化け物の姿は無い。

「今のは、足音じゃなかったのか……？」

「あんなでっかい音をたてるものなんて、あれ以外にないわよ」

しかし、どこにも姿は見えない。

ズドン。ズドン。ズドン。

「どこだ！？」

ポセットがトンファーを構える。姿は見えない。

「きゃあああああ！」

スズが悲鳴をあげた。その細い足に、地面から生えた緑青色のツタが巻きつき、握りつぶす勢いで締め付けていた。

「スズ！　うわっ！」

不意に足をとられた。見れば、ポセットの足にもツタが巻きついている。かなりの力で、振りほどけない。

「ナット！」

声をかけずとも、ナットは飛びかかっていた。ツタをひっかき、先端をブチンっと切り飛ばすと、ツタは苦しそうにもがき、地中に潜った。

ポセットは腰に据えたナイフを引き抜き、スズの足に絡むツタを切り裂いた。気色の悪い、黒く淀んだ液体を飛び散らせ、ツタは地中に消えた。

「今のは……」

落ち着く隙さえ与えることなく、再び地面が揺れた。ナットがポセットの肩にしがみつく。

「ポセット！　来るよ！」

「僕に掴まれ！」

ポセットが僅かにアクセルを入れる。体に、波打つ鼓動が広がる。

「待って、テルルが！」

スズがテルルのもとへ走る。しかし、間に合わない。地面が盛り上がり、次は数え切れないほどの数のツタが飛び出してきた。

「テルル！　テルルーっ！」

叫ぶスズはポセットに抱えられ、宙を舞っていた。ポセットが身を翻し、スズの視界も回転する。嵐のような光景の中で、横たわるテルルをツタが静かに飲み込んでいくのが見えた。

宙を舞うポセットは廃屋の壁を蹴り、そのまま植物の迷路の中へ着地した。しかし、地中に巣食ったツタは、いち早く居場所を突き止めるだろう。ポセットはスズを抱えたまま走りだした。アクセルの重ねがけは思った以上の負担になっていたが、意に介している暇はない。

「降ろして！　テルルが！　テルルーっ！」

道がわからないポセットは、迷路をただ闇雲に走っていく。すると、さっき化け物が残した大きな道に出た。真っ直ぐに走り、小屋へと向かう。

「テルルーっ！」

スズの声が秋晴れの空に悲しく響く。

その２３　襲撃（後書き）

つづく。

その２４　またもやもや

辺りはすっかり暗くなった。

ツタの追走から逃れ、二人と一匹は半壊の小屋に居た。ランプを灯し、沈黙に沈む。

スズは顔をあげない。泣いているのか、怒っているのか、それすら分からない。きっと両方だろう。

どうしてテルルを連れてこなかったのか、とスズに何度も迫られた。スズを助けるために仕方がなかった、あのままだと二人とも捕まっていた、と説明しても、スズが納得するはずなかい。ポセットも何ともつかない気持ちに苛まれていた。

息苦しい静寂がずっと続いている。

大きな穴が開いた壁を、風が吹き抜けていく。ナットは揺れるランプを眺めて、ぼんやりと尻尾を振っていた。

ぐぐぐうぅぅ〜……。

音に反応したスズが包丁を握り、ポセットがトンファーを構える。しかし、それはナットの腹の虫だった。

「にゃ。し、失礼……」

呆れ顔のポセット。冷たく見つめるスズ。ナットは苦笑いしながらそっと丸くなった。

ぐぐぐぐぐうううぅ〜〜〜……。

しかし、もっと大きく鳴った。

「――ぷ。あはは、あっはははは。ちょっと、やめてよ、私も我慢してるんだから。あはははは……」

スズが笑いだした。柔らかい彼女の表情に、ポセットも少し安心した。

ぐぐぅ。

「きゃ」

あんまり笑ったからか、次はスズのお腹が鳴った。白い顔が、ほのかに赤く染まる。

「ははは」

きゅう。

うっ、とポセットがお腹を押さえる。

「――ごはん、食べましょうか。昨日のシチュー、少し残ってるわ」

温めたシチューが、お腹を満たした。壁に開いた大穴から、楕円の月が見える。今にも崩れそうな小屋は、奇跡的なバランスで建っているようだった。

ナットが名残惜しそうに皿を舐めていると、スズがおもむろに口を開いた。

「あの化け物がどうして私とテルルを襲ったのか。そして、送り込んできたのは？あいつ？だろうけど、どうして送り込まれたのか。大体予想は付いているの」

スズは空に輝く月を眺めた。

「私が思っている通りなら、テルルは殺されたり、怪我させられたりはしていないわ」

「君の予想って？」

スズはゆっくりと、分かりやすく説明した。それが本当ならと考えると、ポセットの？あいつ？へと怒りはより強まった。

「命を、何だと思っているんだ……」

「あいつにしたら、極上の実験対象といったところなんじゃないかしらね。自分の知識欲を満たすことだけが、あいつの生きる目的よ」

秋の夜はとても静かで、それがかえって不気味だった。

「あのツタは、化け物から出たものとみて、間違いないね？」

「ええ、ああやって、町全体を飲み込むつもりなのよ。そんなことさせないわ。ここは大丈夫よ。迷路を作り出すあの植物たちが張り巡らせた根で、ツタは入ってこられないはずだから」

「ずっと思っていたことだけど、あの迷路は、いったいなんなんだい？　とても自然のものとは思えないけど……」

「あれはね、私たちの体を蝕む寄生植物たちなのよ」

「え！」

「安心して、もう活動していないって言ってるでしょ。寄生され、死んでいった人々が埋められたのが、この場所なのよ。死者が続出して、通路の脇にレンガでも敷き詰めるように埋葬していったら、この有様。全く、どうして火葬の習慣がなかったのか、先祖を恨んだわよ」

「そうだったのか……」

外では、清らかな秋風に揺れる迷路が、月光に青白く輝いていた。

「そうだ。君に渡すものがあるんだよ」

「あら、なに？」

ポセットは海岸で見つけたあるものを差し出した。それは風化が進んで、今にも崩れてしまいそうだったが、表面の汚れをごしごし拭き取ると、深く吸いこまれそうになる深緑の色合いと輝きは未だ健在だった。

「これ……！」

「海岸で見つけたんだ。十字架に供えてあった」

スズはそれをぎゅっと抱きしめた。それは緑色に煌めく、母のネックレスだった。

「そうだったの……」

皿を片づけ、寝室へ向かう。穴のあいた壁にカーテンを引き、スズがネックレスを見つめて座っていた。

「明日、テルルくんを助けに行くんだろう？」

「ええ、手伝って。でも、今は、その後のことを考えているのよ……」

「後？」

ナットが寝室へ入ってきた。ベッドに飛び乗る。

「ねぇ、ここで寝てもいい？　今夜は寒いよ。オイラ、ベッドで寝たい」

「猫って、夜行性じゃないのか」

「猫は眠いときに寝るんですぅ」

「いいわよ。おやすみ」

ナットは、やった！　と嬉しそうに耳を立てると、早速丸くなった。

「ふぅ……。で？　後のことってなんだい？」

「なんだか、私も眠くなってきたわ。明日話すわよ。今日は寝ましょ」

「え」

気になる夜が続いた。

その２４　またもやもや（後書き）

つづく。

その25　最終計画

朝。カーテンから入る冷気で目覚めた。結局、一晩中警戒していたので、ポセットは一睡もしなかった。アクセルを使った体には応えるが、仕方がない。

「おはよう、はやいのね」

なんだか昨日も聞いたようなセリフとともにスズが起きた。大きく欠伸を一つして、朝日の昇りきらない外を眺める。あの化け物のおかげで、小屋からの眺めだけは良くなった。

「今日、終わらせることにするわ」

「え？」

スズは唐突に言うと、さっとカーテンから外へ出て行った。寝ボケるナットを肩に乗せて、ポセットも後を追う。

「なにを終わらせるんだよ」

「全部よ。決めたわ」

スズは振り返り、ポセットに計画を伝えた。スズの目は赤く腫れ、うるうると涙ぐんでいた。その小さな体で、どれほど迷い、悩み、下した決断だろうか。

伝え終わった後、スズの体は震えていた。

「怖い？」

「怖い……」

ポセットは静かにスズを抱きしめた。スズの震えを止めてあげたかった。しかし、止まらなかった。止められるとも思ってはいなかった。

「いこう。君の決断は、何も間違ってない。正しいかはわからないけど」

「ええ。私も……、そう思うわ」

「手伝うよ。出来ることは、全部」

「ありがとう」

スズの決意は固かった。どれだけの悲しみを押し殺しているだろう。

二人と一匹は、テルルの奪還へと向かった。

迷路を抜けると、そこはすでに昨日までの町の姿はなかった。

「何だこれは……」

「ひどい……」

「青臭いよぉ」

町は一面緑青色のツタや根で覆われ、まるで樹海のようになっていた。この一つ一つが、全て化け物に通じている。

「こんなものを投与されたあのおじさんも、随分可哀そうな人ね」

昨日の侵入者を想う。今の彼に、かつての面影は微塵も無いだろう。

「急ごう。テルルくんはどこに？」

「町全体に均等に根を張るには、中心に行く必要があるわ。きっと、あの化け物は町の中心から根を張り巡らせたはずよ。――ということは……」

目指すは、レパードさんの像がある、中央広場。

今いる場所からはそう遠くない場所だ。ツタは眠っているのだろうか、昨日ほど活発に動かない。

よく見れば、あちこちの地面から顔を出す根にも、場所によって成長の速度に差があるようだった。

「日光よ。陽の光を浴びないと、動けないんだわ」

「なるほど。なら、なおさら急がないと。もう日が昇るよ」

鈍いツタの動きは簡単にかわすことが出来た。広場まではほとん

ど一本道。あっけなく到着出来た。

「あれは……」

広場には、大きな木が一本そびえていた。毒々しい緑に覆われた、グネグネと形を変える奇怪な樹木。それは幾本の根の集合のようだった。

「化け物め」

「あ、見て、あれ！」

レパードさんの像の下。寄りかかるようにテルルが座っていた。ぐったりと、全く動こうとしない。

「テルル……！」

「待って」

出て行こうとするスズを、ポセットが引きとめる。

「僕だけで行くよ。君はナットと一緒に町の門へ」

「そんなことさせられないわ！」

「君も狙われているんだ。思い返せば、昨日も君とテルルくんだけに関心を示していたように思える。僕が行ったところで、特に反応しないかもしれないだろ」

「そんなこと……」

「いいから。テルルくんをあんな目に合わせたのは、僕の責任だ」
「ち、違う、あなたの責任なんかじゃ……」
「いいから、早く。陽が昇ってしまう。ナット、スズの護衛、頼んだよ」
「まかせて。ポセット、しっかりね」
スズとナットは、テルルをポセットに託し、一足先に町の門へと急いでいった。
「さて……」
時間は無い。早速行かなくては。ポセットは一気に走って、テルルのそばに駆け寄った。
「テルルくん、テルルくん！」
声をかけても、テルルは返事をしない。最悪の状況が頭に浮かんだが、幸運にも、テルルは生きていた。息をしている。
「よかった……」
ポセットから僅か十数メートルの場所で、巨大な木の化け物がその身をくねらせている。
かすかに雄叫びのような声も聞こえる気がする。一刻も早く、ここを立ち去らなくては。

テルルを背負い、巨大な化け物を睨む。

「急がなくちゃ」

走りだす。背後では、廃屋を越えて差し込む日光が、緑青の肌を照らし始めていた。

町中の地面から、化け物の根がはい出ている。日光を浴びた途端、狂ったように動き始め、やがて、対象を背負い逃げるポセットを仕留めようと、無数の腕がポセットを襲い始めた。

「捕まるか！」

ポセットも逃げる。町の門は、まだ見えない。

その２５　最終計画（後書き）

つづく。

その２６　群青の大地

一方、スズたちは門についていた。

「大丈夫かしら……」

「大丈夫じゃなくても、ポセットはちゃんと来てくれるよ」

スズはすこし微笑んだ。そして、何粒か錠剤を取り出し、飲み込んだ。

「なにそれ？」

「テルルに飲ませていた薬よ。植物の働きを抑制してくれるわ。でも、それはつまり、私の体の機能も抑制されるってことよ。たくさん飲むから、動きも鈍くなるだろうし、もしかしたら一歩も動けなくなるかも。あなた、ちゃんと私を守ってね」

「にゃん、オイラにまかせて」

陽が、その輝く姿を現した。町が光に包まれ、同時に、あちこちでどす黒い根が活動を始めた。

門の傍でも、獲物を狙う蛇のように根が建物や地面を伝って這い寄ってくる。

「ま……、まかせたわよ」

「オイラ、今日はちょっと都合が……」

根が猛ったように身を反らせ、さながら檻のように形作る。それはナットたちに向かっての行動ではなく、門へ接近する別の目標への対処だった。

「あ！　きた！」

「こっちよ！　早く！」

ポセットの背後からは無数のツタが追ってきていた。眼前にはツタの柵。とてもジャンプで越せる高さではない。

「ポセットぉ！」

しかし、心配ご無用。

「たぁぁっ！」

ポセットは力任せに檻をぶち破った。ツタがちぎれ飛び、ポセットはそのまま町から出て行った。スズたちも続く。

百メートルほど門から離れたところで、テルルを静かに下ろした。

「ほ、本当に、大丈夫かな……？」

「――大丈夫みたいね。町から出たけど、テルルは生きてるわ。私の思った通りよ」

町から出てはいけない。それは、町のなかに充満している物質が、

植物の成長を妨げているからだった。町から外へ出てしまうと、止まっていた植物の成長が再び始まり、体がのっとられてしまう。

「あの化け物は、？あいつ？に目的を与えられているわ。それは、大切な実験材料である私たち姉弟の捕獲よ。町の外に運び出さなきゃいけないから、きっと、死んでしまわないように、これよりももっと強力な薬を投与して、植物の進行を止めるはずよ。その薬はあの化け物が体内に……。テルルはもうそれを投与されているはずよ」

そう言ったスズの考えは正しかった。テルルは町の中と同じように空気を吸い、生きている。植物は眠ったままなのだ。

「私はこの薬でなんとかするわ」

スズはテルルが飲んでいた薬で植物を弱らせることにした。そしてそれも成功したようだ。決して無謀なことではなかった。

「行きましょう。ここも安全とは言えないわ。テルルを、お母様のところへ」

「うん、行こう」

テルルを背負って、歩きだした。ナットはスズの肩の上。

「私も見たことないのよね。ちょっと楽しみだわ」

海とは、どんなところなのだろうか。

肌寒い風が吹いている。町では微かだった潮の香りも、ここまでくればかなり強い。

「これが、海……」

紺青の海は神秘的に煌めいて、その波の音は、家を取り囲む植物の迷路が風と共に唄う声よりも、深い包容力があった。

「これが、テルルが見たがっていた……、海なのね」

テルルはポセットに背負われ、まだ目を開けない。植物と共生の状態にある彼らは、植物が弱ると本人も弱ってしまう。

おーい、と遠くからポセットの呼ぶ声がした。まっさらな砂浜に、くねる足跡。それを辿って、ポセットを追う。

「これが、その十字架だよ」

名前は無い。しかし、このネックレスが何よりの証明。誰の墓なのかは、分かっている。

「お母様……」

スズが泣き崩れる。頼りない十字架に触れると、ボロボロと削れていく。触れることもできず、生き場を失った両の手が、寂しさを握りしめる。

ポセットは帽子を取り、胸に手を置いて祈った。ナットは涙を流すスズの顔にそっと身を寄せる。

「ありがとう……」

スズはナットの頭を撫でて、すっと立ち上がった。

「あとは、テルルと一緒に、海で泳ぐだけね」

スズの顔に迷いは無かった。しかし、恐れは隠しきれない。

「――そうだね」

テルルが目覚めたのは、日も高くなった真昼だった。衰弱しきった息遣いで、まるで何年も寝ていたようにゆっくりと目を開けると、大きく欠伸をした。

「おはよう、テルル」

「お姉ちゃん……。おはよぉ。――あれ？　あの怪物は？　ここどこ？　小屋は？」

見覚えのない空。スズはテルルの身を起こし、抱きしめた。

「大丈夫。大丈夫だから……。ほら、ごらん。彼が連れてきてくれたのよ」

ポセットはスズの傍に立っていた。とてもさみしそうな笑顔で。

「連れきて、って……？」

聞き慣れない音。繰り返し聞こえる、水の音。潮の香り。まさか……。

テルルはゆっくりと振り返った。目の前に、視界いっぱいに広がる群青の大地が広がる。

「海……だ……」

テルルはガバッと立ち上がり、駆けて行った。打ち寄せる波を掴もうと、手を濡らす。服が濡れることもいとわず、膝まで海に入って、匂いを感じる。夢でないことを確かめるように、何度も波に手を浸す。

「海だ……、本当に……。海だ！　やったぁ！　あはは！　はは、ははは！」

テルルはばしゃばしゃと波の中を駆けまわる。そして海と向かい合い、視界に入りきらないほどの大きさに、息をのむ。

「すごい……。海だ……」

テルルが振り返り、スズを呼ぶ。

「行ってきなよ。スズ」

「ええ」

スズが立ち上がり、肩のナットを撫でる。ナットは素早く肩から飛び降りた。

「どうしたの？」

「ああ、ナットは水が大嫌いなんだ」

「そうなの。じゃ、行ってくるわ」

冬の近づく、冷たい海ではしゃぐ二人の姉弟。その身には悪魔が巣食っている。ここに居ること、居られること、それは奇跡であり、最悪の事態でもある。

しかし、二人は多くのものと引き換えに、僅かに残った奇跡を精一杯楽しんでいる。二人は、幸せなのだろう。それは、喜ぶべきことなのだろう。

それなのに、ポセットの心は曇っていた。

その２６　群青の大地（後書き）

つづく。

その27　最深部で濁る青

西の空に、茜色の陽が沈んでいく。テルルは遊び疲れて寝てしまった。いや、？生き疲れた？とでも言うべきなのか。

「テルル……」

スズは、二度とこの目が開かないことを知っていた。薬の投与を続けないまま、町の外で活動することはできない。そして、テルルに与えてあげられる薬は、ここにはない。

聞こえ辛くなっていく呼吸が止まるのも、もうしばらくのことだろう。

「今から、町に戻ってもダメなのかい？」

スズは首を振った。

「外で生きていられたこの時間。これはテルルが今までちょっとずつ、ちょっとずつ溜めてきた幸いが成した奇跡よ。もう、この子には生きる力は無いわ……。何より、テルルはもう、生きる目的を達したもの」

打ち寄せ、消える波。絶えることなく続く連鎖も、一つ一つは弱く、儚い。

「この子が植物に食われるところなんて、見たくないわ。テルルは、テルルのまま、消えていってほしい」

スズはテルルに最後のキスをした。まもなく、この体から新芽が吹き、辺りに種子を飛ばすのだろう。

「この子は、この広い海に還すわ。きっと、この子も喜んでくれるはずよ」

「喜ぶさ。テルルくんは、お姉ちゃんが、大好きなんだから」

スズがテルルを背負って、冷たい海を進む。ポセットが、後ろから支える。ナットは心配そうにお留守番。

あまり深くまではいけないので、胸のあたりまで浸かるくらいまで行くと、ゆっくりテルルを下ろした。スズはテルルの体を軽々と抱える。気持ちが、体力を越えて、スズに力を与えていた。

「さようなら、テルル……。さようなら……。ありがとう……」

テルルの体を海へと沈める。ゴボゴボと気泡が水面に浮かび、やがて、止まった。

「う……、うぅ……う……」

スズは手を放した。テルルの銀の髪が、水中でゆらゆらとなびく。

「テルル……。さようなら……、さようなら……」

透き通る水面から、テルルの姿が微かに見える。その顔は、柔らかに微笑んでいるように見えた。

テルルの体は波に誘われ、どんどん沖へと流れていく。まるで海がテルルを受け入れ、その身を溶かし、一つになろうとしているように思えた。

テルルは、広大なる海へと還った。

紅い夕陽に染まった海は、スズとポセットを浜へと追いやるように波をよこす。

まだ来るな。海がそう言っているようだった。

「綺麗。本当に……綺麗……」

砂浜に寝転がり、スズが戯言のように繰り返した。

しばらくして、二人と一匹は海を後にした。砂浜に吹く、止むことのない風は、奇跡の足跡すら流していく。

振り返れば、今残してきたはずの足跡すら無く、まるで初めから誰もいなかったかのように、砂浜はまっさらになっていた。

辺りは段々暗がりに沈みつつあった。

スズはポセットの背の上で、苦しそうに息をしている。

「スズ、大丈夫？　もう少しで町だから……」

スズが背中で微かに頷いたのがわかった。

海から帰る途中、スズは突然倒れた。薬で抑えてはいても、体に深く寄生する植物の力は、想像を超えるものだった。

共生の状態にあるのは、植物が命を守るためにやむなくとっている手段である。成長を妨げるかせが消えれば、あっという間にスズの体を蝕み、乗っ取り、スズの命を飲み込んでしまうだろう。

「ほら、町が見えてきたよ。もう少しだ」

「気を……つけてね」

そう、町には?あいつ?が送り込んできた化け物が根を張っている。

「迷路に逃げて……。迷路には、化け物も入ってこられないわ。亡き町の人々が、私たちを守ってくれる……から」

迷路を作り出す寄生植物の群生地帯は、地に深く根を張っているため、化け物も易々とは根を張れない。

「わかってる、急ごう。もう話さないほうがいい」

進む道の先に、ひときわ黒く歪んで見えるスズの故郷が見えてきた。心なしか、その影がうねうねと蠢いて見える気がする。

「本当に、やるのかい?」

今朝伝えられた計画。スズは町を守ることにした。例え一人になっても。

「やるわ。あの化け物に、私の……私たちの町は渡さない」

暗闇に沈んでいく町。ポセットが門を越えた。途端、ツタが動き出し、侵入者を嗅ぎつけた猟犬のように、ポセットたちを追い始めた。

「しっかり掴まっててて！　走り抜けるよ！」

迷路を目指し、ポセットが駆ける。

町の領域に踏み入った。静かに苦しみが消えていく体。スズはポセットの背中で、ゆっくり目を閉じた。

その27　最深部で濁る青（後書き）

つづく。

その28　亡くして弔って

小屋の中を寂しげな風が吹き抜けていく。ランプが揺れて、ポセットとスズの顔が交互に照らされる。

小屋にナットが帰ってきた。

「大丈夫。やっぱり、迷路のおかげで化け物は入ってこられないみたいだよ」

見周りを終えたナットがポセットの肩に戻る。

「でも、あんなでっかい化け物、とても倒せないよ。町に入ったときに襲ってきたけど、ツタも増えてたし、動きも機敏だし、なにより、化け物が建物よりも大きくなってた。一目で居場所が分かるから、便利と言えば便利だけどね」

あの化け物はまだまだ成長を続けている。この迷路が崩れるのも時間の問題と思われた。

「確かに、普通に倒そうとしても難しいわ。でも、やっつけるなら、今よ。今日みたいに月明かりも少ない夜は、活動が鈍くなるから」

「なら、一刻も早く……」

「いいえ、まだよ。もっと夜が更けてからにしましょう。それに、準備もいるわ」

どうやって倒すのか？　それは簡単。かつて、寄生された町の人

々が、最後の最後まで人のままであろうと選んだ死に方。炎でもって、灰に帰すのだ。

ナットには、とても出来るとは思えない作戦だった。

「あんなに大きいのに、どうやって燃やすの？　オイラは火をつけても消されちゃうと思うよ」

「大丈夫よ。ちゃんと考えてあるもの」

外にでる。暗がりで揺れる迷路。スズは名残惜しそうにその壁を撫でた。

「みんなで、帰りましょ。忌まわしいものは全て焼いてしまうわ。きれいになって、みんなで……」

覚悟が決まった。

ランプ用の油。それを小屋の周りの迷路に撒いていく。ランプの灯を分けると、あっというまに火の手が上がった。

「ポセット、止めないと！　火事になっちゃうよ！」

「大丈夫だよ、ナット。これも作戦のうちなんだ」

もうもうと煙が上がり、黄金の焔が小屋を囲む。

一方、町の広場。レパードさんの像は無残に崩れ、巨大な樹と化

した化け物が、陽の力を失い、休眠に入っていた。

意識はなく、あるのは生きるための本能のみ。しかし、その本能の中に、僅かに残るある使命。それは、スズとテルルを連れ帰ること。

誰から与えられたことだったか、なんのためのことなのか、それを考える知能は無い。ただ、やるだけ。

夜の暗闇で、段々と体が重くなっていく感覚。

そのとき、体に僅かな光がさした。活力の源である?熱?を感じる。そこに、連れ帰るべき目標がいるだろうか。しかし、自身の根は、あそこまで行けない。地下深く支配する、あの迷路を作り出している植物の根が邪魔をして、通れないのだ。

しかしやはり、あそこに目標がいるのだろう。何よりも、夜の闇で体が動かず、窮屈していたのだ。あそこには光があり、熱がある。

ブチブチブチブチッ……。根が引きちぎれる音がして、巨大な化け物の足が地面から離れ、高く上がった。ズドン、と力強く地面を捉えると、また根を引きちぎり、もう片方の足を持ち上げる。

一日で町の地下の大半を支配した自らの根を捨て、化け物は熱源へ行進を始めた。根ならまた張ることが出来る。なにより、そこには魅惑的な?エネルギー?があった。

歩くたびに体が軋み、ボロボロと破片が落ちていく。巨大な体ゆえ、触れた建物が崩れ、バキバキと音を立てる。体もそれに見合って崩れる。しかし、行進は止まらない。

何も無くなってしまった夜と言う世界の中で、その灯りはまさに命の灯。多少の被害など気にしない。

ズドン、ズドン……。一歩踏み出すたびにすごい音と地響きが鳴る。

ナットの耳がピピッと振れる。

「来たよ、ポセット！　あっちだ！」

ナットの指す方向を見る。暗闇の中、左右に大きく揺れる何かが、肉眼で捉えられた。

「スズ、来たよ！」

スズが頷く。小屋を背に、化け物と向かい合う。

「行って。手はず通り頼んだわよ」

「任せて」

ポセットは小屋にあったありったけの油を手に、迷路へと消えた。残されたナットが、スズの肩に乗る。

「怖くない？　オイラがついてるよ」

「ありがとう」

化け物は炎の円の中へと入ってきた。首が痛くなるほど見上げて、初めてその姿の全てを把握できる、それほど大きく成長した化け物を、スズが苦々しそうに見る。

「あなた、あたしを捕まえるのが狙いなんでしょ？」

化け物は地割れでもおきたような、低く凄まじい雄叫びをあげた。覆いかぶさるようにして、スズに顔を近づける。どこが顔かは、近くで見ても分からないが。

手を伸ばせば届く距離。スズの肩に座ったナットが毛を逆立て、緊張に震える。スズはそれでも、化け物から遠のくことはしなかった。足をその場に打ち付けたように、微動だにしない。

「あなたは、昨日の男の体を媒介に発芽して、？あいつ？の思い通り、そこまで立派に、醜く育ったのね……。あなたという命に罪は無いわ。でも、ごめんなさい。あなたを消さなくてはいけないの。分かってもらおうとは思わないわ。ごめんね」

スズは銃を取り出した。昨日の男、つまり、今目の前にいる化け物の器にされた哀れな旅人が持っていた、リボルバータイプの銃。それを空に向かって、バンバンと軽快に撃ち尽くした。

合図。

ポセットは撒き終えた油の缶を放った。迷路の壁に染みさせた油の道は、大きく化け物を囲んでいた。トンファーを取り出し、スタンガンのスイッチを入れる。

紫の灯が飛び、油が爆発するかのような勢いで燃え始めた。植物の迷路が一転、灼熱の火炎地獄と化す。

化け物が異変に振り返る。背後には轟々と燃え上がる炎の壁。それは風によって舞い、流れ、段々と広がっていく。背後で繰り広げられる炎のドミノ倒し。あっという間に、見渡す限り火の海となった。

力の源である熱。しかし、それは度が過ぎれば体を焼く害になる。化け物はすでに、地獄の真っ只中にいた。

熱の海で苦しむ化け物。しかし、眼前には目標である少女が、同じく苦しそうにうずくまっている。捕らえようとツタを伸ばした。

所々が焦げ、キナ臭さを立ち上らせるそれは、弱り動けなくなったスズの白い腕を強引に締め上げ、地獄に誘うように引き始めた。スズには到底抗うことが出来ない。朦朧とする意識の中、炎が迫る。

その２８　亡くして弔って（後書き）

つづく。

その29　朝日を待つように

なされるがまま引きずられ、視界が全て紅蓮の壁で覆われた。

パァンッ！

辺りが焼け崩れていく音とは別に、乾いた破裂音が夜空を切り裂いた。ちぎれたツタが苦しそうにもがき、行き場を失って悶える。

紫の灯を携え、構えを取るポセットが、ツタを払った。

「スズは渡さない。――代わりに、これをあげるよ」

ポセットはスズが持っていたランプを取り上げると、化け物に向かって投げつけた。ランプは化け物のお腹の辺りで弾け、メラメラと火の手をあげた。

化け物が奇声をあげる。暴れるたび、燃え上がる迷路から吹き上がる炎が飛び火して、灼熱が化け物を段々飲み込んでいく。

スズが倒れた。咳をして、苦しそうにうなだれる。

「スズ、大丈夫？　はやく避難しよう……！」

「ダメよ。迷路はもう火の海。抜けられっこないわ。ここで、燃えないことを祈って、倒れていることしか……」

冬の近づく季節とは思えないほど、辺りは熱く、明るい。顔が火照り、汗が噴き出す。

目を開けていられないほどに輝き、荒れる業火の大地。撒き上がる火炎で、スズたちの小
屋が音を立てて崩れた。ふらつくスズを、小屋から遠ざける。

化け物影が僅かに見える。黒い塊となった化け物の、身ぶるいするような断末魔が響いた。しかし、それも業火が荒れ狂う轟音の中に消えた。

「スズ！　気をしっかり持つんだ、スズ！」

「大丈夫……、大丈夫よ……」

「ポセット、熱いよぉ！　助けて！」

こうなることは覚悟の上だったが、まさかここまで大きく燃えるとは思わなかった。炎に囲まれたそこは決して快適ではなく、取り巻く灼熱に身を焼かれる、巨大なオーブンのようだった。

「ポセット！　照り焼きになる！　オイラ、猫の照り焼きになっちゃうよぉ！」

「くそ！」

ポセットたちは井戸のそばに移動した。スズを寝かせ、必死の思いで井戸から水を汲み、桶の水をスズにかけようと持ちあげる。

「ダメだよ、ポセット！　頭にかぶったら、熱中症になっちゃう！」

「そ、そうか……。ナット、助かったよ」

「にゃん」

桶の水をスズの顔にぺたぺたと塗りつける。ポセットとナットも水を体に塗る。すこしでも体温を下げるのだ。あまりの眩しさと熱さで目が開けられないため、ほとんど手探りでの作業。

塗りつけても、塗りつけても、肌はすぐに乾き、熱を浴びる。ポセットがまた水をすくい取り、スズの頬へと持っていく。

スズが目を開けた。ポセットの方を見てはいるが、焦点はずっとずっと遠く、ポセットの背後のさらに後ろにあるようだった。そこはつまり、炎の明かりで真っ白に見える、夜空。

スズがそっと口を開いた。

「最後の夜ね……。綺麗……。綺麗な夜だわ……。本当に……」

ポセットには、アクセルを使っているわけでもないのに、世界が止まってしまったように、静かに感じた。熱さも、光も消えて、スズの柔らかな表情が、語りかけてくる。

「スズ、諦めちゃダメだ！　スズ！　スズ！」

スズが首を振る。

「これで、めいっぱいよ。私の命は、これで……。ありがとう。あなたのおかげよ……」

スズの手がポセットの頬に触れる。優しく撫でるように、白い手が滑る。

「スズ……？　もしかして、目が……？」

スズはポセットの唇に手をやり、言った。

「呼んで……。私の名前……。呼んで……」

スズの意識は朦朧とし、見た目以上に衰弱している。

「スズ……！　スズ！　スズ！　しっかりするんだ！　スズ！」

スズはふっと笑みを浮かべると、ゴホゴホと激しく咳こんだ。その口から、そろりと静かに血が流れた。呼吸が荒くなり、ポセットを掴む腕に力が入る。

「スズ？　スズ！」

スズはポセットに顔を近づけ、震える声で言った。

「聞いて……。私の体は……、植物に乗っ取られてしまう前に……炎で灰にして……。あなたに、やってほしい……。お願い……」

「スズ……」

ポセットはスズを抱きしめた。もう助からないのだろう。自分には救うことはできないのだろう。今してあげられることは、彼女の望みを叶えること。炎で、弔うことだけ。

「任せて……、スズ……。君も、君のままで……」

「ありがとう……」

スズは、もはや力の入らない腕で、何やらポセットに差し出した。それは、ポセットが拾ってきた、母のネックレスだった。

「あなたが、預かって……。お願い、あなたたちで……。？あいつ？を……止めて……」

ポセットがネックレスごと、スズの手を握る。

「スズ……」

ナットが悲しげに鳴いた。スズの手が空をさまよって、探り当てたナットを撫でる。

吹き抜けた風に煽られ、灼熱の業火が雄叫びをあげる。スズは優しい微笑みを浮かべながら、安らかに眠りについた。それでも、ポセットはスズの体に水を塗り続けた。

炎が消えたのは、翌朝。東の空に明星が輝きだした頃だった。

その２９　朝日を待つように（後書き）

つづく。

その30　残った約束

まだあちこちに残り火が燃えている。化け物だったものは、今やただの炭の塊になっていた。世界中が焦げ臭く感じる。

ポセットはスズを抱き上げて、地面に寝かせた。今にも目を覚ましそうな、綺麗な死に顔をしている。

「どうするの？　ポセット」

「約束だ。炎で……弔おう」

安らかに眠る、少女の最後の願い。ポセットは崩れた小屋に手をかけた。廃材の中にスズを寝かせ、そこらの残り火をかき集める。

「君たちの思い出も、一緒に持っていくといい。ここは、君たちの町なんだから」

姉弟が二人で過ごしてきた小屋。ポセットにとってはただ数日のことだったにも関わらず、狂おしいほど愛おしく、同じくらい悲しかった。

小屋に火を灯す。昨晩の業火に比べればなんてことないが、十分に大きく燃え上がった。

蛍火のように、小さな火の粉が空に舞い上がる。陽炎と赤炎の階段を上って、スズの魂が

空へと還っていく。

茜色の海へと消えたテルルの姿を思い出した。スズは遥か天空か

ら、澄み渡る海を、愛する弟を見守り続けていくのだろう。

燃え盛る炎が消える前に、ポセットは町を後にすることにした。

「行こう、ナット。この町は、とうとう最後の命も失ってしまった」

迷路は消え、残ったのは見渡す限りの焼け野原だけ。まだあちらこちらから煙が上がっている。

ポセットとナットは広場まで来た。迷路のせいで分からなかったが、案外近い。レパードさんの像は粉々に砕け、町はさらに崩れて、廃墟と言うよりも鉄クズ置き場だった。

「ポセット、寒いよぉ」

地獄のようだった熱気も、ここまでくると木枯らしにあてられて冷え切っていた。ナットがポセットのスカーフに潜りこむ。

「あったかぁい」

「ナットもね」

それにしても寒い。そう言えば、鞄にはライターが入っている。ポセットは鞄を開けた。真っ先に目に飛び込んできたのは、真っ赤なドレス。

「そうだ、おばあさんのところへ行こう……。これを返さないとね」

「結局、居なかったもんね。おばあちゃんの孫」

ごそごそと奥を探る。手に当たる何か。ライターに違いなかった。引き抜くと、一緒に紙の束がバサバサと落ちてきた。

「おっと……、これは……？」

なんだろう、これは？　でもいいや。寒いし、これを燃やして……。

はっ、と気付く。これは、スズたちの五十年前の絵の傍にあった、何かの書類。

「オイラが見つけたやつだね。早く燃やそうよ。オイラ冬眠しちゃうよ」

「まて、ナット。これは……」

すっかり忘れていたが、今一度目を通す。かすんで見えないところもあるが、スズから得た情報で補えば、読み取れる部分で十分これの正体がわかった。

「これは……、緑化病の……薬……、その研究内容だ……」

食い入るように読む。どうやら、スズたちがその身に投与した、植物の成長を止める薬のことについてのようだ。何枚もある資料の最後、隅に小さく、名前が書いてあった。

「――クレア＝リメルヒ……。ローザ＝リメルヒ……」

スズが言っていた言葉を思い出す。――お母様とお婆様は、偉大な研究者だったわ。

スズに渡されたネックレスを見る。裏には、名前が彫られていた。

「レパード＝リメルヒ……愛する……クレアに送る……」

クレアとは、スズたちの母の名前らしかった。

「そうか……」

また風が吹く。焦げた匂いを吹き飛ばして、潮の香りが微かに薫った。

町の門へと向かう。ほとんどの建物がつぶれ、無事なものは一つもないようだった。味気ない角を曲がる。そこには、壁が吹き飛び、さらされた大きな絵が、ポセットを見送っていた。

「スズ……」

絵に近寄り、見上げる。

「！」

まずポセットが、次にナットが気付いた。

「ポ、ポセット……。これって……」

「そうだったのか……、初めから……」

なぜ気がつかなかったのだろう。？あいつ？は、ポセットも知っている人物だった。

その場を去ろうとするポセット。ふと、傍の戸棚に目が行った。古びた本が並び、支える段は折れて、本が床に飛び散っている。書類もここから手に入れた。

戸棚になにか入ってはいないか。探ってみるが、開けばページが千切れるようなボロボロの本ばかり。何も収穫は無さそう。

「やめてよ、ポセット。埃立つから」

「なにも……ないな」

ガタンッ！　引き出しには穴があいていて、引いたときに中のものが飛び出したようだった。床には、掌ほどの小さなケースが落ちていた。そっと開いてみる。

「なにそれ？」

「なんだろう……」

細身で透明な器具。注射器のようだった。透明な液体が半分ほど入っている。ケースに一緒に入っていたメモを取り出し、読む。

「なになに……」

そこには注射器内の薬の効能と、もしものときに使うこと、という言葉があった。メモの端には名前。

「クレア……。クレア＝リメルヒ……」

それは、スズの母の名だった。

赤のドレスを広げ、綺麗にたたむ。

「行こう、ナット」

「うん」

ポセットは町を後にした。命の消えた町。朽ち行くだけの、悲しい町。そこに続く荒れた道。

朝日が、雲の切れ間から僅かに輝く。今日の空には、黒く重い雲がかかっていた。

その３０　残った約束（後書き）

つづく。

その31　しょうたい

再び踏み入る秋色の山。しかし鮮やかだった木の葉は全て落ち、地面には湿った枯れ葉の絨毯、顔をあげればみすぼらしく痩せ細った枝々。

「ここにも、命がないみたい。オイラたちだけ、ずるいかな？」

「どうだろうね」

一歩一歩、踏みしめて行く。再び、海が見えた。黒く冷たい、石の大地のようにも見える。

やがて見覚えのある場所まで来た。太陽は高く昇っているだろう。空を見上げたポセットを、曇り空がむなしく見下ろす。

「そろそろだな」

しばらくして、山小屋が見えてきた。息を整え、扉に駆け寄り、何度も扉を叩く。

「おばあさん、僕です！　ポセットです！」

ゴトゴトと音がして、扉が開く。優しい顔のおばあさんが顔を出した。

「あらまぁ、どうしたんだい？」

「あの、これ……」

ドレスを出す。おばあさんはしわ一つ動かすことなくドレスを見た。

「お孫さんは、見つかりませんでした。これ、お返しします」

おばあさんはドレスを受け取って、にっこり笑うと、家に招き入れてくれた。

温かいココアの匂いに、ナットが飛び跳ねる。バタバタとやかましいナットを掴んで、鞄に納めた。鞄が生きているようにモゴモゴ動く。

「あらあら、ケンカはダメよ。ココアはたくさんあるの。飲んでいくといいわ。今日は雨になりそうよ」

おばあさんはお盆にカップを二つ乗せてやってきた。

「前もこうやって、ココアを頂きましたね」

「ええ。美味しかったでしょう？　猫ちゃんは大好物だったわよね？　まだあるから、たくさん飲むといいわ」

「いえ、今回はご遠慮します」

スクッと立ち上がり、おばあさんと向かい合う。

「どうしたの？」

「あなたは、杖をついて移動しておられますね」

「ええ。歳をとると足腰が弱くなってねぇ」

「でも、ココアのカップはお盆に乗せてもってきましたよね。杖を使わず。そういえば、この前もそうだった」

「ちょっとくらいなら使わなくてもたいしたことは無いのよ。それより、ほら、お座りなさいな。疲れたでしょう？　昨日は大変だったわねぇ。見えたわよ、炎が上がってるの。酷い火事になったのね。あなたもあそこに居たんでしょう？　心配だったの」

ポセットはそっと座った。おばあさんはニコニコと話しかける。

「怪我もないみたいで、よかったわ」

「これを」

ポセットは書類を机に並べた。

「緑化病と言うものはご存知ですか。ふもとの町で五十年ほど前に流行ったそうですが」

「ああ、それなら聞いたことがあるわね。なんでも、体が植物に乗っ取られてしまうんでしょう？　怖いわねぇ。でも、ここに居れば安全よ。そんな病気怖くないわ」

「あなたは確か、娘さんと一緒にこの山小屋に移ってきたんでしたよね？」

「そうよ。それがどうか――」

おばあさんに手を差し出す。手には緑のネックレスが握られていた。おばあさんの顔が、一瞬険しくなった。

「あなたの、娘さんのものですよ。――ローザ＝リメルヒさん」

曇天の空から、冷たい雨が降り出した。

嫌いな雨も寒さも忘れ、ナットはひたすら走っていく。枯れ落ちた葉の上に、いくつも小さな水溜りが出来ている。

「どこまで行ったんだろう……？」

ポセットの強さは常人とは比べようのないほどのものである。ナットもよく知っていることだ。しかし、それは僅かな時間だけ。ポセットに備えられた機能である？アクセル？は凄まじい力を生み出すが、力を出せば出すほど、使っていられる時間は限られてしまう。最大まで発動したなら、十数秒までもつだろうか。何より、ポセット自身の体がもたないだろう。ポセットが強力な相手を倒すときは、一撃で仕留めなくてはいけない。

本人はもちろん、ナットすら百も承知のその制約。しかし、先ほどのポセットは油断していた。相手の姿形に惑わされ、アクセルの出力を抑えたままで、しかも先手ではなく、迎え撃つ形で戦闘に入ってしまった。最悪。

「死んでなきゃいいけど、ポセット……」

走るナット。木々をかわし、ポセットの匂いを追う。まもなくして、ドゴン、ズドン、と何度かすごい音がした。遠くは無い。

「ポセット！」

音の方へ向かう。木々がなぎ倒され、地面にはえぐったような跡がいくつも付いている。

一方、ポセットも山の中を駆けまわっていた。手にはトンファー。仕込まれたスタンガンが喉を鳴らす。しかし、ポセット自身にそれほどの闘志と元気は無い。

「くそ……」

激しい運動をしたように、苦しく息が切れる。思わぬ展開に、アクセルを全開近く発動させることでしか、あの場をやり過ごすことが出来なかった。ポセットの決定的な弱点である、アクセルの反動が全身を襲う。再び使えるようになるまでは、少し休まなくていけない。

ふと、背後に気配を感じる。見る前に、体でかわした。大木がへし折れ、倒れこんできたのだった。ポセットが抱えてもまだ足りないほど太く、逞しい巨木。

ポセットはゆっくりと立ち上がり、へし折った犯人と向き合った。距離は十二メートルといったところだろうか。互いに姿が見え、互いに臨戦態勢。

「鬼ごっこは終わりかい。さぁ、大人しくお眠り」

目の前のそれは、すでに人の形をしていなかった。体中を緑青色の太いツタが覆っていて、異様に盛り上がったその体に、元通り変わりない頭部がやけに小さく見える。

「まさか、自身にまで薬の投与を行っていたとは、驚きましたよ。ローザさん」

ローザは木々を蹴散らし、悠然と向かってくる。いとも簡単に根元からへし折れる巨木の群れが、その出鱈目な力を見せつける。

その３１　しょうたい（後書き）

つづく。

その32　生命の研究

「これが、植物の……。いえ、生きとし生ける全てのものが持つ？生命力？、生きる力よ。コンクリートの道を持ちあげ、文明の町を飲み込み、永遠に消えない生命の完璧な形。ごらんなさい……」

ローザは腕を大きく開いた。腕の先では緑の太いツタが四つに分かれ、まさに人あらざる、化け物の凶悪さと獰猛さを表しているようだった。曇天から僅かに降り注ぐ日光を浴び、ドクドクとツタが波打つ。

「私と共に、脈打つこの命……。寄生植物はあの町に死と荒廃をもたらしただけではない。この私に、永遠の生命力を与えた……」

ポセットの表情が重く、深く、そして冷たく沈みこむ。

「永遠の、命……？」

「そう。永久に消えることのない、無限の生命。ついに、ここまで……。長かったわ。体内に巣食う植物を鎮静、支配、果ては望み通りに成長を促し、体を強化させる……。どれほど待ち望んだか……。実験には苦労したわ……。何しろ、残っていた検体は二体……。死んでしまわないように、逃げ出さないように、色々配慮したの。でも、かわいい自分の血族ですもの、大事にしないとね。検体が死んでしまうかもしれない実験には、通りすがりの旅人を使ったわ。こんなところに来るのは大抵ろくでもない放浪者ばかり……。何の価値もない命だものね」

「二人は……あなたが、体内から植物を消しさる薬を……、自分たちを救ってくれる薬を作っているのだと……、信じていました」

ポセットの手が怒りに震え、スタンガンの紫の炎が一層猛る。

そのための実験だったと言うのか。スズとテルルの命は……。自らの孫を糧としてまで得る価値のあるものだったのか。それ以前に、初めから、スズとテルルを救うつもりはなかったと言うのか。

「あなたは、何を怒っているの？　あなたも、何の価値もない命の持ち主……。何も残すことなく、やがて消えていく小さな灯。でも、送り込んだ実験体は、十分な成果を示してくれたわ。わかる？　どうしようもなく、救えないあなたたちの命を、私が実験で使ってあげることで、何かを残す、価値ある命にしてあげられるのよ。痛みは無いわ。怖いのも、最初だけ。後は、幸福と永久の栄光が待っているのよ」

「次は、僕で実験するというわけですか」

「ええ。あなたは大切な私の検体二つをなくしてくれたわね……。許せないことだけど、あなたはテルルと似た体格をしている。あの子は弱くて、十分な実験が出来なかったわ。あなたなら、その穴埋めにはもってこいよ。それで許してあげる。さぁ……」

ググッと体が持ち上がり、ポセットは初めて、四肢にツタがからみついていることに気がついた。

「な！？　くそ……っ！」

締め付け、身動きを封じるツタ。ローザが近づいてくる。しかし、

ポセットの目には、しっかりと希望の光が見えていた。

「もっと、まわりに気を配った方がいいと思いますよ」

奇怪な姿に怯むことなく、ナットがローザに飛びかかる。唯一変化のない顔にしがみつき、バリバリと爪を立てる。奇声と共に、ツタが緩んだ。

「助かったよ、ナット！」

「うにゃお」

ナットはひょいひょいっと身軽にローザから離れ、ポセットの肩につかまる。

再びアクセルを発動、意識が研ぎ澄まされる。

ツタが槍のように飛び込んでくるが、弾丸を捉え得るポセットの動きなら、かわすのは容易なことだった。そのまま一足飛びで相手の懐へと飛び込む。

「これで終わりだ！」

スタンガンが吠える。弾けるように鋭い音が鳴り、紫の火花が散る。

「ふん」

しかし、スタンガンは届いていなかった。地面から生えたツタがポセットの腕を捕らえ、引きとめていた。

「くっ！」

しかしトンファーは二つある。もう一方を叩きこもうと、腕を振りかぶる。しかし、ローザの巨大な腕がポセットを吹き飛ばした。初めのトンファーとナットが宙に残される。

「ポセット！」

ナットは素早くポセットに駆けよる。近くの木にぶつかったので、先ほどのように遠くまでは行かなかった。しかし、ダメージは大きい。

アクセルが切れた。全身に疲労感が走り、ダメージと重なって、立ち上がるので精いっぱい。木に寄りかかり、なんとか立つ。

「くそ……」

「ポセット、大丈夫！？」

「スタンガンね。さっき、小屋の中でも使ったわね。それしか武器は無いの？」

ローザにネックレスを見せ、一瞬の隙にスタンガンで気を失わせるつもりが、植物で体を変異させたローザの一撃で小屋の窓をぶち破り、遥か遠くまで投げとばされたポセット。スタンガンはすでに読まれている。トンファーのような近接武器では、あの怪力を前には部が悪い。

「さぁ、もう観念なさい。あなたはなかなか骨のある命を持ってい

るようね……。敬意を表して、あなたには特別な薬をうちこんであげる。一昨日の旅人みたいに不完全な化け物にはならないわ。この私のように、植物の力を操れるようになる……。それだけじゃない。もっと、もっと強力な力も手にできる……」

「願い下げですね。あなたは植物に呑まれている。支配している気になって、結局は植物に操られているだけだ。目を覚まして下さい、ローザさん。まだ、間に合う……」

「ふん。変わった命乞いね……」

ツタは確実にポセットを捕らえる。足から蛇のように巻きつき、上ってくる。

「ナット……」

ポセットの小声に、ナットがピピンと耳を立てる。肩から腰の鞄に飛び移り、ごそごそ何やら引っ張り出して、ささっと逃げ出す。

「あらあら、薄情な猫ちゃんね。ご主人を見捨てるなんて」

「ナットは相棒です。あれでも、自称賢猫ですよ……。ぐぅっ……」

ギリギリとツタがからむ。両腕の自由を奪い、首にツタが回る。ギリギリと全身が絞られるように締め付けられる。

「殺さないわ、安心して……。あと、最後に教えてあげる。あなたはさっき、私をローザって呼んだけど。私はローザじゃないわ」

「な……に……？」

おばあさんの顔にはもう、しわは無かった。スズたちと同じく真っ白な肌は若々しく張りがでて、みるみる美しい女性の顔になった。

「その……顔は……」

そこにいたのは間違いなく、絵に描かれていた人物。スズたちの横で微笑んでいた、母親だった。

「私はクレア……。あの子たちの母……。そして、ローザの一人娘……。母は緑化病で死んだの。あのネックレスを持ってるってことは、海岸のお墓には行ったみたいね。あれは、私がつくったのよ。私のお墓みたいに、ネックレスをかけてね」

「そんな、どうして……」

「うふふふ……。いい演技だったでしょう？　あの子たちも、私を祖母のローザだと思っていたようね。親子だもの、顔は似ているわ。母になりきっていたのは、一人孤独に山で生活を送る老婆の方が、旅人の同情を買うのにも、警戒心や不信感を和らげるのにも役立つと思ったからよ。じゃあね、おやすみなさい」

意識が薄れていく。

その３２　生命の研究（後書き）

つづく。

その33　白雪に送られて

「うにゃあああああ！」

ナットが枝から飛び降りる。ポセットの首にかかるツタに飛びかかり、またも爪を立てる。しかし、痛覚がないのか、びくともしない。

「あら、ホント、賢い猫ちゃんね。折角だし、あなたにもなにか投与してあげる。動物実験も大切だもの」

すすすっとツタが忍び寄る。ナットはにやりと不敵な笑みを浮かべ、尻尾をサッと持ち上げた。尻尾の先でくるりと一巻き、器用に注射器を持っていた。それは、町を去る時、絵の部屋の近くで見つけたものだった。

それをグサリとツタに突き刺した。素早く前足で抑え、ぎゅうっと注射器内の液体をツタに流し込んだ。

「ん……？　何を……」

ツタがグネグネと動き、ポセットの首から離れた。苦しそうにのたうち、地に伏せる。

「なに……！　どうして！？　この猫！　何を！」

「オイラは賢い猫ちゃん、ナット様。かわいいからって油断したね」

「ごほっごほっ……！　よくやってくれた、ナット」

「まかせにゃさい」

ナットはポセットの肩の上で誇らしげに胸を張る。ポセットを締め上げていたツタがふにゃふにゃと力なく倒れ、ポセットが解放される。クレアが戸惑いながら声を荒げた。

「バカな！　なぜ！？　――まさか！」

「思い当たる節はあるようですね……。それもそうか、あなたはクレアさん。そして、この薬を作ったのも、紛れもなく、あなた自身なんだから」

それは、作り出したものの使用することが出来なかった、体内の植物を殺す薬。その薬の強さゆえに、感染者である人間の命も奪ってしまう、最後の薬。

「バカな！　バカな！　なんてことを！」

「その慌てぶりから察するに、やはり、かなりの効き目があるようですね。――スズもテルルも、人のまま逝きました。あなたも、せめて、人のまま……」

クレアが怒りに狂う。奇声を荒げ、腕を振りかぶる。しかし、体は意思とは反対にぐずぐずと動かず、果てはボロボロと崩れだした。緑青の肌が割れ、剥がれ、白い素肌が現れた。

クレアはその場に伏した。よろよろと立ち上がり、ポセットを睨む。

「おの……れ。お前のような……、小僧に……。お前はぁっ！　あの二人の命を無駄にしたんだぁっ！
私の研究を！　永遠の追及を！」

「テルルは……死ぬ前に、行きたかった海で、大好きなお姉ちゃんと思い出を作った。スズは町を守りきり、人のまま命を絶った。あの姉弟は決して無駄に死んでなんかいない。あなたを今ここで追い詰めたのは……、他でもない、彼女たちだ」

ポセットが目を閉じる。昨晩の灼熱の中で聞いた、スズの言葉がよみがえる。あいつを止めて、と。

クレアは鬼の形相で空を仰ぎ、断末魔をあげた。口から泡を吹き、膝から崩れ、小さく丸まった。近づいて触れる。呼吸は無い。体は硬直して動かない。

「死んじゃってるの？」

「どうやら、ね」

冷たい風が吹き抜けていった。

黒い空からは、綺麗な光る結晶が舞い降りてきた。

「雪だ……」

「うにゃあ……、さ、寒い……」

「行こうか、ナット。山を降りよう」

固まってしまったクレアの体を持ち上げ、倒れた木々を追って進む。まるで枯れたスポンジのように軽い。

なんとか山道に出た。窓が吹き飛んだ山小屋が一つ、ポツンと建っている。

「ここでいいだろう」

小屋のそばに、小さな穴を掘った。クレアを埋め、立ち上がる。雪は勢いを強くすることなく、しかし止む様子もなく、降り続いている。

「急ごう、ポセット。こ、凍えちゃうよ！」

「ああ、行こうか」

立ち去る前に、クレアの墓を見る。なんとも味気なかった。ポセットはしゃがみこみ、ネックレスを供えた。

「永遠の命に魅了された、末路か。でも、これで元の優しいお母さんに戻れますよ。大地に還って、スズとテルルを支えてあげるといい。きっと、また笑って会える」

そうして、山小屋を後にした。降り続ける雪。空から無限に舞い降りるそれは、スズからの花束だろうか。ほのかな冷たさがポセットをチクリと刺す。

歩く中、少しずつ積もっていく雪。一人山を行く少年にも、白い雪が積もりつつあった。ポセットはやや神経質に雪を掃う。

肩の黒猫、ナットが言った。

「冷たいね、ポセット」

ポセットと呼ばれた少年が答えた。

「うん。――きっと、生きているから……だね」

薄く積もった雪の道。次の旅へ、足跡は真っ直ぐと続いて行った。

その３３　白雪に送られて（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。

今回はなんだか反省点が多すぎてトホホな感じでしたが、一応形になりました。

誤字脱字、確認してはいるのですが、もしかしたらあるかも……。

ご指摘、ご感想などなど、いただけたら嬉しいです。

お粗末さまでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8338p/

生命の研究

2011年1月11日14時14分発行